

昭和58年度感染症の動向，および病原微生物の分離状況について

岡崎 秀信・香西 俣行・吉原丘二子・十川みさ子
 山本 忠雄・山西 重機・水嶋 利治・古川 正強^{*2}

I はじめに

感染症患者発生情報は，香川県において昭和56年9月から内科・小児科17定点，病院3定点，眼科3定点，計23定点で発足し，2年余を経過してほぼ年間を通じての状況把握と，患者採取検体からの病原微生物検出による流行状況の解析が可能となった。しかし，一部地域においては定点の不足から，実情に合致しない面も生じたが，それより以前に発足した高松小児科談話会，西讃小児科談話会により情報で補足して来た。しかし，大部分は重複しており，一本化が望まれていたが，昭和59年1月より情報定点の追加を行う予定で内科・小児科23定点，病院6定点，眼科3定点，計32定点となり，高松，西讃小

児科談話会による情報は県情報に一本化されることとなった。昭和58年度は西讃小児科談話会による情報は8月，高松小児科談話会情報は12月で終了した。なお検査定点は従来通り7定点とし，流行時，不明菌分離時の定点などは随時行うこととした。

II 方法と材料

前年度と同様，月報の形で集る情報の解析，配布してある各種輸送基地に検体採取の都度送付を受け分離に供した。

III 成 績

1. 感染症の発生状況

表1 感染症の月別1定点当たり患者数

昭和58年	疾 病 名 Disease	月	高松小児科談話会 13定点 西讃小児科談話会 10定点 香川県感染症サーベイランス 17定点												Total 順位
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
1.	麻疹様疾患 Measles	高松	0.2	0.1	1.8	1.6	2.4	1.8	0.5	1.2	1.2	0.2	—	0.2	11.1 ⑬
		西讃	—	—	0.3	0.3	0.8	4.6	0.8	0.3					
		県サーベイ	0.1	—	1.1	0.9	1.7	2.3	0.7	0.6	1.4	0.2	0.2	0.6	
2.	風 疹 Rubella	高松	1.2	0.4	1.4	2.5	1.8	1.0	0.1	0.2	0.1	0.3	—	0.2	9.0 ⑭
		西讃	8.1	8.6	16.3	23.5	19.0	14.9	9.5	3.4					
		県サーベイ	5.2	8.2	16.2	13.8	10.9	9.5	3.7	1.2	0.5	0.2	0.4	0.2	
3.	水 痘 Varicella	高松	13.4	8.8	12.7	11.8	11.3	12.8	7.8	1.8	0.9	2.4	2.7	7.4	94.0 ②
		西讃	22.5	17.6	18.2	11.0	14.6	17.4	11.8	6.3					
		県サーベイ	15.9	15.3	21.4	11.7	14.4	18.8	9.3	5.9	1.7	1.4	6.7	10.8	
4.	流行性耳下腺炎 Mumps	高松	9.2	5.5	5.2	3.8	3.2	1.8	1.8	2.1	0.9	0.6	1.3	0.4	35.8 ⑨
		西讃	21.0	9.1	12.0	10.6	10.5	9.6	11.7	5.8					
		県サーベイ	13.6	9.4	11.7	8.4	8.8	10.5	6.9	4.8	2.4	1.1	1.1	0.9	
5.	百日咳様疾患 Pertussis	高松	3.0	2.5	3.2	3.5	4.3	1.9	1.8	2.2	1.4	1.0	0.2	0.5	25.7 ⑪
		西讃	1.9	0.9	1.0	3.1	1.1	1.2	1.0	1.4					
		県サーベイ	2.2	1.2	2.9	3.1	2.7	1.8	1.4	1.8	1.7	1.6	0.8	0.3	
6.	連鎖苔感染症 Streptococcosis	高松	2.8	1.8	2.4	1.2	2.1	2.2	1.6	0.8	1.4	2.8	4.3	3.8	27.2 ⑩
		西讃	1.7	0.9	0.5	0.8	0.5	1.1	1.3	0.5					
		県サーベイ	1.6	1.3	1.8	1.3	0.8	1.4	1.4	0.6	0.8	1.2	3.1	3.5	

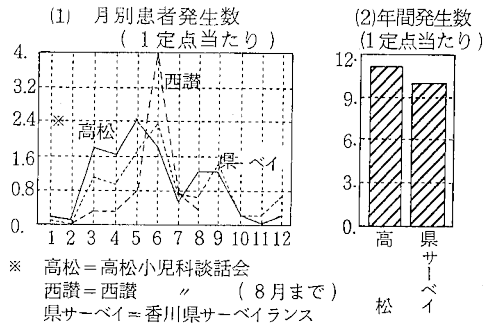
*1 高松小児科談話会

*2 西讃小児科談話会

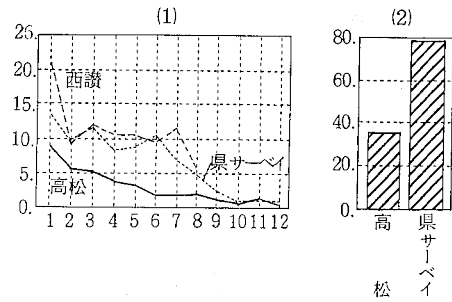
疾病名 Disease	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	Total	順位
7. 異型肺炎 P. A. P	高松	0.2	—	0.1	0.5	—	0.2	0.7	0.3	0.7	1.0	0.7	0.4	4.6	
	西讃	0.7	0.3	0.2	3.1	0.5	0.3	1.0	0.6	—	—	—	—	4.2	⑮
	県サ-ベイ	0.1	0.2	0.1	0.4	—	0.1	0.6	0.1	0.1	0.4	1.4	0.8	40.9	⑧
8. 乳児嘔吐下痢症 Child vomiting diarrher	高松	11.0	6.2	6.1	0.8	0.3	0.2	0.1	0.2	0.1	0.2	2.0	13.8	40.9	⑧
	西讃	29.5	14.2	3.1	5.0	3.5	0.6	1.2	1.6	—	—	—	—	72.1	⑥
	県サ-ベイ	21.5	15.4	8.3	0.9	0.6	0.3	0.2	0.1	0.4	1.1	4.1	19.3	77.2	③
9.a 流行性嘔吐下痢症 Epidemic vomiting and diarrher	高松	15.2	11.7	7.7	1.3	0.3	—	—	0.3	—	1.0	1.4	38.3	77.2	③
	西讃	29.7	18.4	7.5	1.6	4.9	5.0	0.2	2.2	—	—	—	—	75.1	⑤
	県サ-ベイ	16.9	9.7	10.4	1.2	0.2	1.6	0.6	—	0.1	0.4	7.1	26.9	46.2	⑦
9.b その他の感染性 下痢症 Other infectious diarrher	高松	2.6	4.2	4.2	4.5	3.6	3.6	2.9	3.0	2.5	4.0	5.5	5.5	46.2	⑦
	西讃	—	0.1	0.7	0.7	0.6	0.2	2.1	0.8	—	—	—	—	35.4	⑨
	県サ-ベイ	2.4	2.9	2.4	1.8	2.2	2.5	1.6	2.5	1.3	3.1	5.7	7.1	54.4	⑤
10. 手足口病 H. F. M. D	高松	1.4	0.4	0.6	2.6	13.0	27.2	7.6	1.2	0.3	—	—	—	54.4	⑤
	西讃	1.5	0.2	—	0.2	0.6	3.0	2.0	1.1	—	—	—	—	26.1	⑩
	県サ-ベイ	1.7	0.5	0.4	1.1	3.6	11.5	5.2	1.4	0.2	0.4	0.1	—	4.3	
11. 伝染性紅斑 Erythema infection	高松	0.2	0.5	0.2	0.8	1.1	0.7	0.4	—	0.2	0.1	0.1	0.2	4.3	
	西讃	—	0.3	—	0.2	—	—	0.1	0.2	—	—	—	—	3.9	⑯
	県サ-ベイ	—	1.2	0.2	0.9	0.4	0.9	0.7	0.2	0.2	—	—	0.1	59.2	④
12. 突発性発疹 Exanthema subitum	高松	3.5	2.8	5.4	4.6	6.2	4.7	5.2	4.8	6.3	5.5	5.9	4.2	64.8	⑧
	西讃	5.0	3.8	2.5	5.9	7.3	8.4	8.1	7.9	—	—	—	—	47.2	⑥
	県サ-ベイ	4.2	2.1	4.7	4.3	5.8	8.2	6.0	8.1	6.0	5.0	5.4	3.9	89.0	③
13. ヘルパンギーナ Herpangina	高松	0.3	0.1	0.2	0.8	2.2	12.6	18.7	7.8	2.9	1.2	0.3	0.2	0.8	
	西讃	0.4	—	—	25.9	31.8	59.5	58.1	24.7	—	—	—	—	0.8	
	県サ-ベイ	0.7	0.2	0.4	0.9	3.5	26.9	29.5	18.3	5.0	2.3	1.0	0.4	89.0	③
14. 咽頭結膜炎 P. C. F	高松	0.3	0.1	—	—	—	—	—	0.2	0.3	—	—	—	0.8	
	西讃	—	—	—	5.8	5.0	2.2	1.8	3.2	—	—	—	—	2.6	
	県サ-ベイ	—	—	—	0.1	—	0.4	0.5	1.8	0.2	—	—	—	0.2	
15.a 細菌性髄膜炎 Bacterial meningitis	高松	—	—	—	—	0.1	—	—	—	—	—	0.1	0.1	0.2	
	西讃	—	—	—	—	—	—	—	0.1	—	—	—	—	2.3	⑳
	県サ-ベイ	—	—	0.3	—	0.3	—	—	—	—	—	1.0	0.7	4.6	
15.b 無菌性髄膜炎 Aceptic meningitis	高松	0.2	0.2	0.1	0.1	0.1	0.9	1.3	0.5	1.0	0.2	0.2	—	4.6	
	西讃	—	—	—	0.1	0.1	0.8	0.7	0.3	—	—	—	—	19.3	⑰
	県サ-ベイ	0.1	0.1	—	0.1	—	0.3	0.7	5.6	8.3	1.7	0.3	—	108.3	①
16. インフルエンザ 様感冒 Influenzae	高松	62.5	37.2	8.1	0.4	0.1	—	—	—	—	—	—	—	172.5	①
	西讃	73.5	37.8	2.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1.8	
	県サ-ベイ	74.2	88.8	7.8	0.1	—	—	—	—	—	—	0.1	1.5	2.0	⑱
17. 川崎病 M. C. L. S	高松	0.5	0.1	—	0.1	—	—	0.5	0.2	0.1	0.2	—	0.2	1.8	
	西讃	0.5	—	—	0.1	—	—	—	—	0.1	—	—	—	2.0	⑱
	県サ-ベイ	0.6	0.4	—	0.1	0.1	0.1	0.2	0.2	0.1	0.1	0.1	—	1.8	
18. 仮性ク룹 Croup	高松	0.1	0.1	0.1	0.1	—	0.2	—	0.1	0.1	0.5	0.2	0.5	1.8	
	西讃	0.5	0.3	0.2	0.5	0.1	—	0.1	0.1	—	—	—	—	20.2	
	県サ-ベイ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0.4	
19. アフター性口内 炎 Aphthous stomatitis	高松	1.4	0.5	1.2	1.3	1.2	2.8	2.4	2.2	1.6	1.9	1.6	2.0	20.2	
	西讃	3.4	1.4	0.6	2.0	2.4	5.6	5.1	4.0	—	—	—	—	0.4	
	県サ-ベイ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0.6	㉔
20. ウイルス性肝炎 Viral hepatitis	高松	0.1	—	—	0.1	—	—	—	—	0.1	—	0.2	—	0.4	
	西讃	—	0.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0.6	㉔
	県サ-ベイ	0.1	—	0.1	0.1	—	0.1	—	0.1	—	0.1	0.1	0.1	111.7	⑫
21. 急性出血性結膜 炎 A. H. C	高松	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	西讃	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	県サ-ベイ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
22. 流行性角結膜炎 E. K. C	高松	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	西讃	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	県サ-ベイ	4.3	8.6	7.0	11.0	5.3	13.0	9.3	22.0	13.0	1.7	7.0	7.0	111.7	⑫

疾病名 Disease	月	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12												Total 順位
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
23. Encephalitis and myelitis 脳脊髄炎	高松	—	—	—	—	—	—	—	0.1	—	—	—	—	0.2
	西讃	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	県サーベイ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
24. Infectious mononucleosis 伝染性単核症	高松	—	0.1	—	—	—	—	0.2	0.5	0.2	0.2	0.1	0.2	1.2
	西讃	—	—	—	—	0.1	—	—	—	—	—	—	—	
	県サーベイ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
合計 Total	高松	129.1	83.2	60.5	42.5	53.4	74.6	53.6	29.8	22.1	23.4	26.3	77.8	676.2
	西讃	199.9	113.7	65.5	100.5	103.6	134.4	116.6	64.6	—	—	—	—	
	県サーベイ	161.9	158.3	91.1	53.1	56.7	99.4	70.4	52.6	25.8	20.0	38.6	77.3	

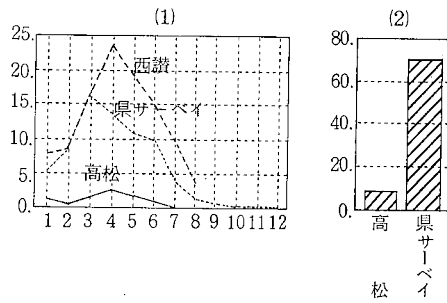
1. 麻疹



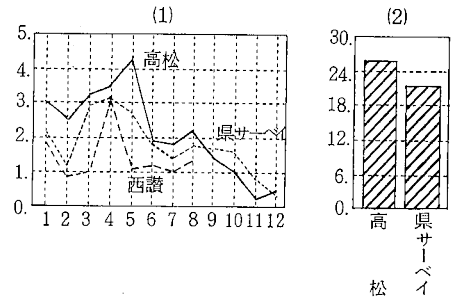
4. 流行性耳下腺炎



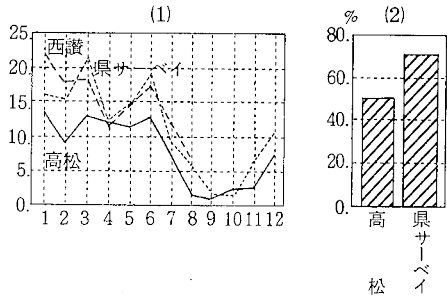
2. 風疹



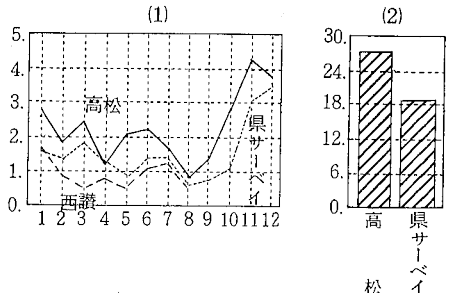
5. 百日咳



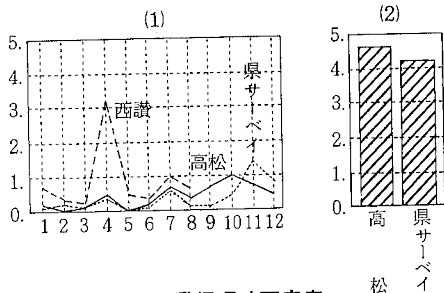
3. 水痘



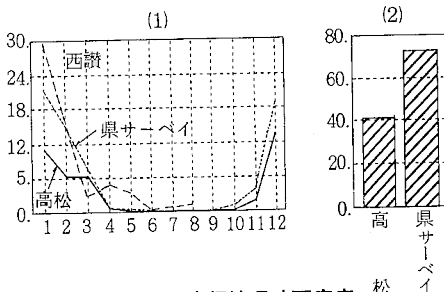
6. 溶連菌感染症



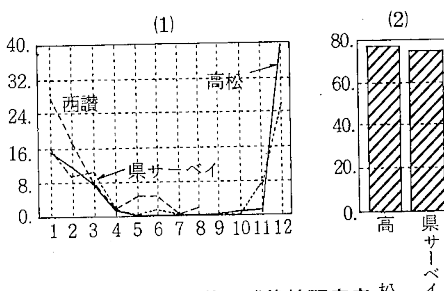
7. 異型肺炎



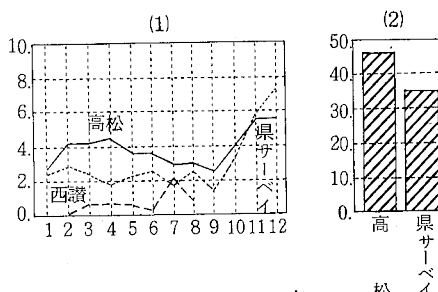
8. 乳児嘔吐下痢症



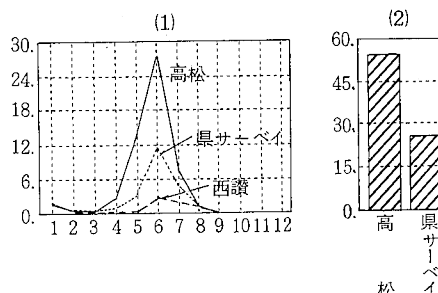
9a 流行性嘔吐下痢症



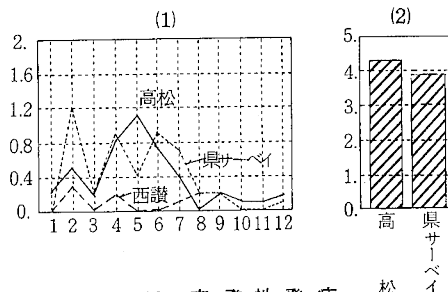
9b その他の感染性下痢症



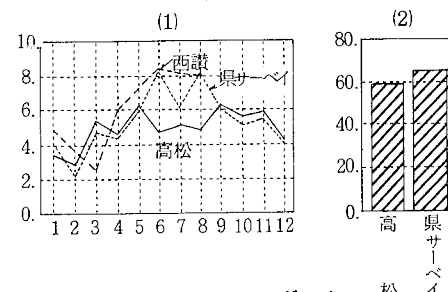
10. 手足口病



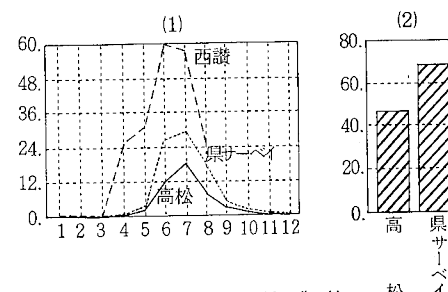
11. 伝染性紅斑



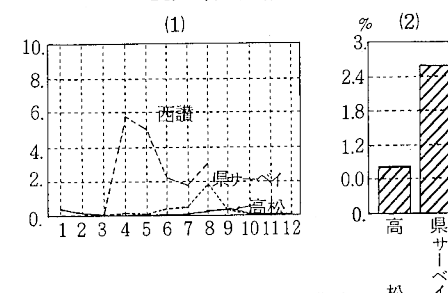
12. 突発性発疹



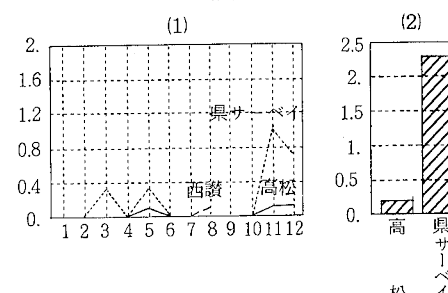
13. ヘルパンギーナ



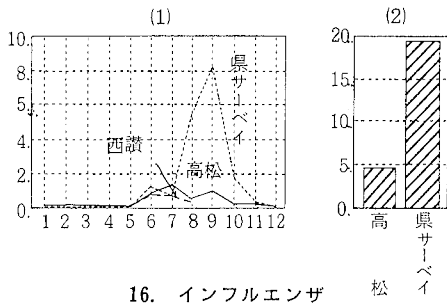
14. 咽頭結膜熱



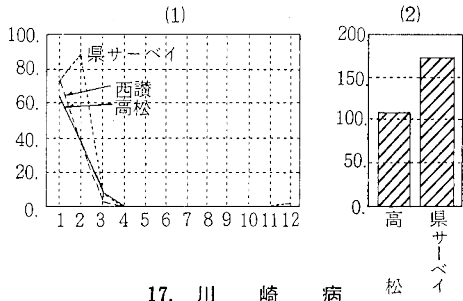
15.a 細菌性髄膜炎



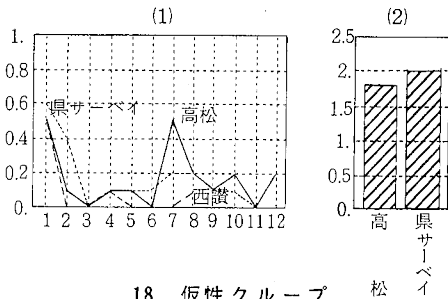
15.b 無菌性髄膜炎



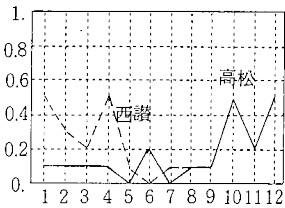
16. インフルエンザ



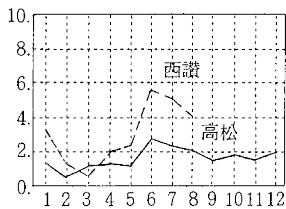
17. 川崎病



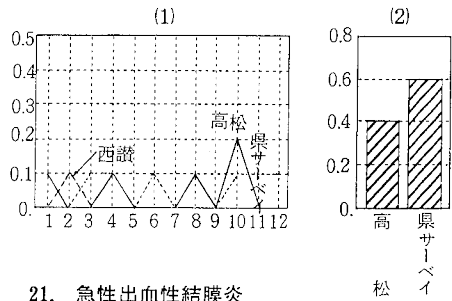
18. 仮性ク룹



19. アフター性口内炎

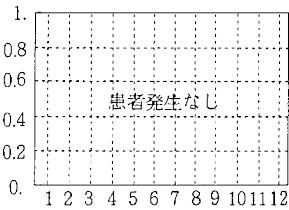


20. ウイルス性肝炎

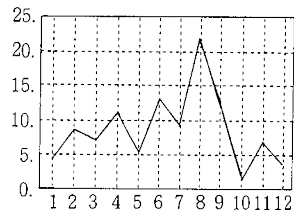


21. 急性出血性結膜炎

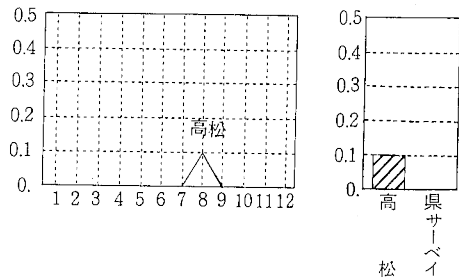
(県サーベイのみ)



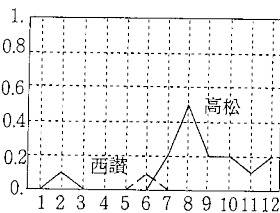
22. 流行性角結膜炎 (県サーベイのみ)



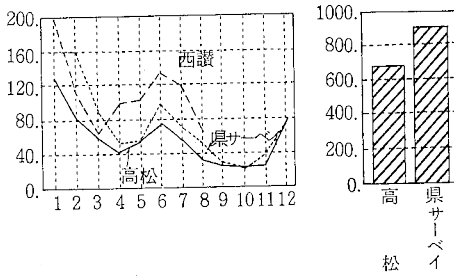
23. 脳、脊髄炎



24. 伝染性単核症 (高松, 西讃のみ)



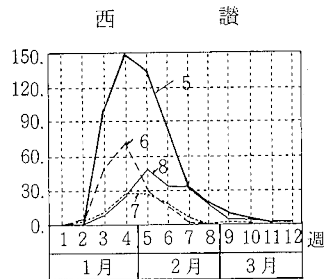
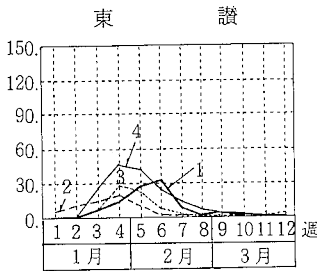
1 定点当たり月別患者発生数(24感染症の合計)



高松、西讃小児科談話会、県サーベイランスで収集された昭和58年度感染症の1定点当たり患者発生状況は、表1、図1に示すとおりである。なお西讃小児科談話会は、8月までの集計である。主な感染症の地区別患者発生状況(1定点当たり)を東讃(高松、小豆島、大内保健所管内、8定点)、西讃(坂出、丸亀、琴平、観音寺保健所管内、9定点)別に県サーベイランスの10位までをあげると次のとおりである(図2)。

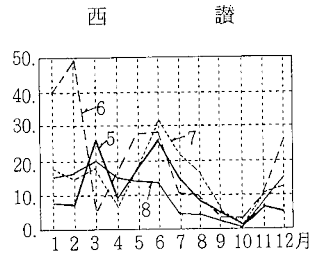
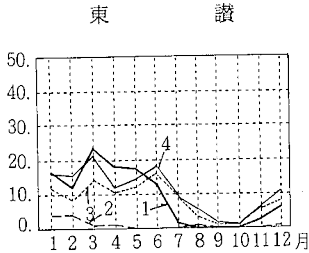
図2 上位感染症の地区別患者発生状況(1定点当たり)

1位 インフルエンザ様感冒

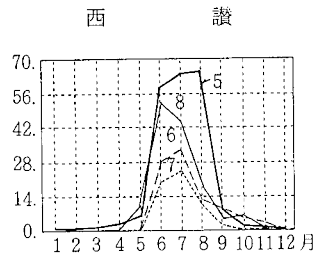
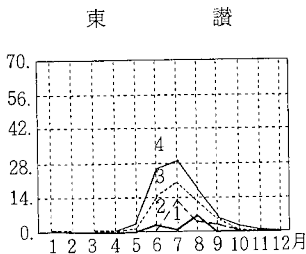


- 1: 大内
- 2: 土庄
- 3: 高松
- 4: 県平均
- 5: 坂出
- 6: 丸亀
- 7: 琴平
- 8: 観音寺

2位 水痘

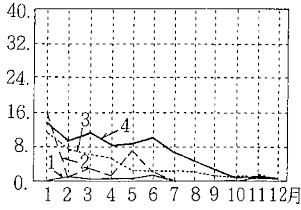


3位 ヘルパンギーナ

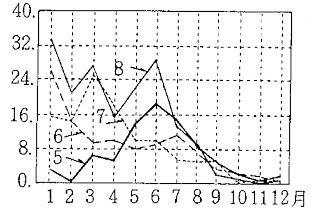


4位 流行性耳下腺炎

東 讚

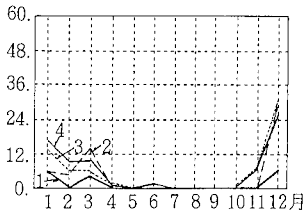


西 讚

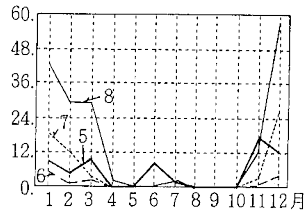


5位 流行性嘔吐下痢症

東 讚

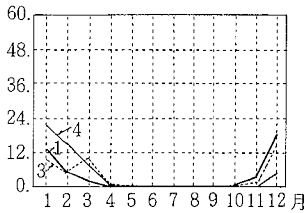


西 讚

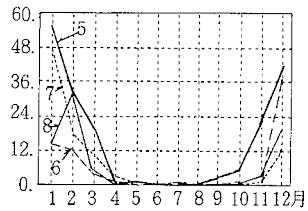


6位 乳児嘔吐下痢症

東 讚

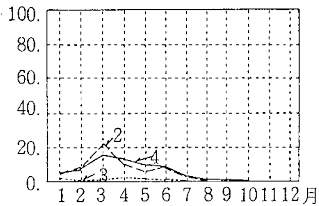


西 讚

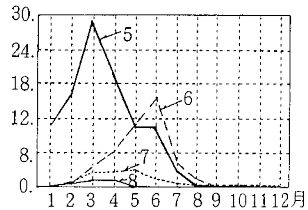


7位 風 疹

東 讚

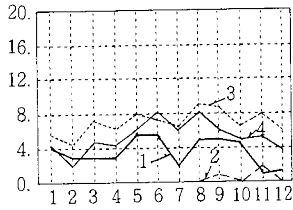


西 讚

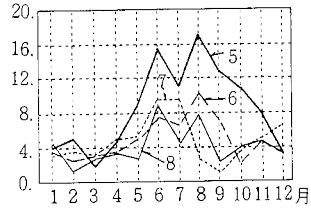


8位 突発性発疹

東 讃

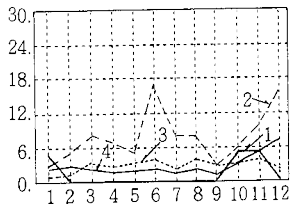


西 讃

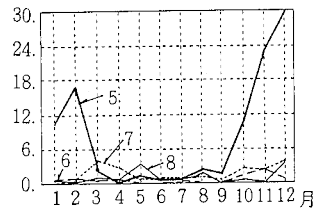


9位 その他の感染性下痢症

東 讃

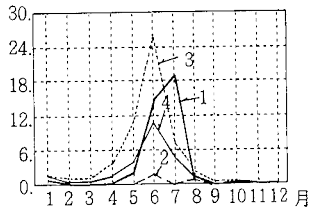


西 讃

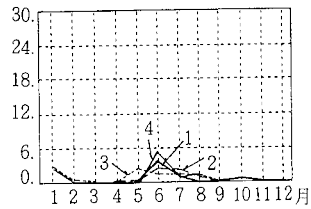


10位 手足口病

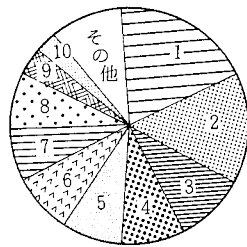
東 讃



西 讃

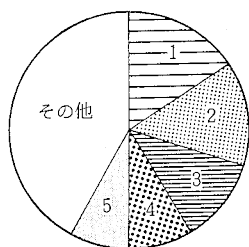


県サーベイランス上位10疾患



順位	疾患名	DATA	%	1 定点当たり
1位	インフルエンザ	2,932	19.1	172.5人
2位	水痘	2,266	14.7	133.3
3位	ヘルパンギーナ	1,513	9.8	89.0
4位	流行性耳下腺炎	1,351	8.8	79.5
5位	流行性嘔吐下痢症	1,277	8.3	75.1
6位	乳児嘔吐下痢症	1,225	8.0	72.1
7位	風疹	1,110	7.2	70.0
8位	突発性発疹	1,102	7.2	64.8
9位	その他の感染性下痢症	602	3.9	35.4
10位	手足口病	443	2.9	26.1
	その他	1,566	10.2	92.1
	Total	15,387		

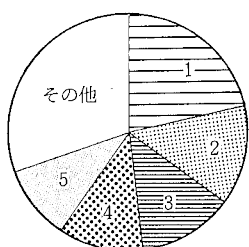
高松小児科談話会



	DATA	%	1 定点当たり
1位 インフルエンザ	1,408	16.0	108.3 人
2位 水 痘	1,222	13.9	94.0
3位 流行性嘔吐下痢症	1,003	11.4	77.2
4位 突発性発疹	769	8.7	59.2
5位 手足口病	707	8.0	54.4
そ の 他	3,681	41.9	283.2
Total	8,790		

西讃小児科談話会

(59年8月末まで)



	DATA	%	1 定点当たり
1位 ヘルパンギーナ	2,036	21.5	203.6 人
2位 水 痘	1,267	13.4	126.7
3位 インフルエンザ	1,254	13.2	125.4
4位 風 疹	1,083	11.4	108.3
5位 流行性耳下腺炎	956	10.1	95.6
そ の 他	2,876	30.4	287.6
Total	9,472		

図 2 a 感染症の月別・年別1 定点当たり患者発生数

1位 インフルエンザ

患者発生は第1週(1/1~1/7)土庄6名, 琴平2名の報告が最初で, 第2週には丸亀, 観音寺が加わり計34名が報告され, 第3週(1/15~1/21)に県下全域に流行が拡大687名の報告があり, とくに坂出地区では一挙に203名の発生をみている。ピークは第4週で, S, 57年より1週間早く, 774名(1 定点45.5人)で昨年度より大幅に減少した。第7週以降漸減し第13週以後報告はない。患者数累計は2,932名(1 定点当たり172.5人)であった。

地区別発生状況は東讃は少く, 西讃に多発している。とくに坂出, 丸亀地区に多く発生した。ウイルスは散発が1月7日, 集団発生は1月21日, 共にA(H₃N₂)が分離され, 以後流行終息までに141株を分離したがすべてA(H₃N₂)であった。

2位 水 痘

年間患者数は2,266名で1 定点当たり患者数は133.3人で昨年より612名, 37%の増加である。冬季から初夏にかけて流行し, ピークは3月と6月の二峰性を示し, 地区別では丸亀, 琴平に多発がみられた。

3位 ヘルパンギーナ

年間患者数は1,513名, 1 定点当たり89.0人で 患者総数の9.8%を占めている。昨年より427名, 39.3%の

増加である。流行は5月~9月の夏季型で, ピークは7月上旬の第27週(7/1~7/7)で8.24人であった。地区別発生状況は大内, 土庄, 高松など東讃は少く, 坂出, 丸亀, 観音寺など中讃, 西讃で多発している。とくに坂出地区では6月第24週(13.5人)から8月第32週(22.5人)まで二桁の発生が続いた。これは昨年と同じ傾向である。

4位 流行性耳下腺炎

昨年3月より増加しはじめた本疾病は, 本年8月頃まで流行が続いた。この間のピークは昨年12月の一定点19.2名で, 本年は1月の13.6人である。地区別では昨年12月のピーク時までは坂出地区が月別1 定点当たり53人で最も多く, 本年に入ってから観音寺地区が1月~6月にかけて33.0人~29.3人とトップを占めている。流行はほぼ終息し, 以後は散発程度となっている。

5位 流行性嘔吐下痢症

県サーベイランスにおける患者発生数は1,277名(1 定点当たり75.1人)で, 11月下旬より3月下旬にかけての流行は例年どおりであるが, 発生数は昨年より多い。地区別では観音寺地区に多発(90.7人)しており, 高松地区(70.2人), 琴平地区(64.5人)がこれについている。大内, 丸亀地区での発生は16.5人と少い。

6位 乳児嘔吐下痢症

流行嘔吐下痢症と同様11月下旬～翌年3月下旬にかけて流行し、患者発生数は1,225名(1定点当たり72.1人)で昨年37.3人の約2倍の発生である。地区別では中讃、西讃に多く坂出地区(185.0人)、琴平地区(100.5人)、観音寺地区(78.7人)が主である。

7位 風 疹

県サーベイランスにおける患者数は1,190名(1定点当たり70.0人)と昨年の約1/2の流行であった。地区別の流行状態をみると、多発地区は中讃の坂出地区(年間1定点当たり333名)、丸亀地区(152.5人)と多発しているが他の地区は大内地区1.0人、高松地区11.0人、観音寺地区17.7人、琴平地区46.5人と非常に少く局地的な流行で推移した。流行のピークは坂出地区が3月(95人)、丸亀地区が6月(52.5人)とずれており、県全体のピークは3月(16.2人)であった。

8位 突発性発疹

患者発生数は1,102名(1定点当たり63.8人)で昨年とほぼ同様で、月別、地区別発生状況も変化はみられない。僅かに西讃地区に5～10月に発生のピークがみられる。

9位 その他の感染性下痢症

患者数602名(1定点当たり35.4人)で昨年よりやや減少している。毎月ほぼ平均して発生しているが、秋～初冬にかけてやや多く1定点当たり3.1～7.1人の発生がみられる。地区別では土庄地区96名、坂出地区99.5名と多く発生している。

10位 手足口病

患者数443名(1定点当たり26.1人)で昨年の約1/4の発生数である。流行は4月～8月の夏季でピークは6月(11.5人)であった。地区別流行状況は大部分が東讃地区で、高松55.0人、大内39.0人とほとんどを占め、西讃地区、中讃地区は6.0人～12.0人と散發程度であった。S.56～57年初めの分離ウイルスはCox-A-16型であったが、S.57年11月以降はEntero-71型が分離されている。

2. 病原微生物分離状況

1) 細菌関係

検体数はサーベイランス検体882件、関連調査検体773件、合計1,665検体で分離菌株数は774株である(表2)。

表2 昭和58年感染症サーベイランス月別検体数および病原細菌分離状況

註 検体数は衛研のみ。病院=7

疾 病	月	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12												Total															
		衛研	病 院	衛 病	衛 病	衛 病	衛 病	衛 病	衛 病	衛 病	衛 病	衛 病	衛 病		衛 病														
下痢症	Salmonella	人 由 来	44	37	70	49	45	75	44	32	30	32	23	29	510														
		環 境 由 来	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	336														
	S. typhi	B	2	11	9	7	8	20	12	5	7	10	3	16	6	22	1	7	2	3	1	3	0	2	37	120			
		C ₁	人 由 来	7	6	5	3	3	3	1	1	3	1	9	2	2	1	1	1	3	20								
			環 境 由 来	2	4	3	3	1	1	1	3	1	9	2	2	1	1	1	3	20									
		C ₂	人 由 来	9	4	3	3	1	4	1	2	3	4	4	1	4	1	22											
			環 境 由 来	3	3	1	1	3	1	4	5	4	5	4	1	22													
		D	人 由 来																										
			環 境 由 来				1																						
		S. dysenteriae	人 由 来																										
			環 境 由 来				1			2			1																
		Others	人 由 来																										
			環 境 由 来																										
		Total	人 由 来	4	11	9	11	8	23	0	16	5	13	0	13	8	26	7	38	2	15	2	6	1	5	0	3	46	180
			環 境 由 来	19	10	9	8	8	5	5	1	21	3	44	21	14	9	164											
溶連菌症	NAG vibrio			1	2	17	20	7	8	2	2																59		
	V. fluvialis	10	1	12	1	0	4	4																			55		
	C. jejuni/coli	8	12	3	5	17	10	19	34	25	60	32	43	4	40	8	18	8	28	8	19	12	8	11	26	155	303		
	E.P.E coli	0	8	8	8	9	9	2	5	2	11	5	10	3	12	7	4	5	1	11	3	9	4	18	41	113			
	K. oxytoca	2	3	2	0	3	0	4	0	1	0	2	4														15	9	
	S. aureus	5	12	0	11	12	14	6	13	4	15	4	14	1	11	5	3	2	1	3	4	11	5	16	47	125			
	Shigella			4	1	15	4	11																			(18)	35	
	V. parahemolyticus																												
	Total	48	50	34	36	88	71	42	72	59	110	68	84	48	89	31	69	62	50	39	39	44	34	39	63	602	767		
	溶連菌症	Group - A	10	15	9	9	8	15	9	6	6	8	11	17	3	10	3	18	7	3	13	14	29	29	17	39	125	183	
Group - B		2	14	2	14	1	16	2	2	0	8	0	10			6	7	10	10	12	15	7	124						
Group - C		0	4	0	4	0	8	0	1	0	3	0	2			1	2	3	2	4	3	0	37						

疾病	月	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12												Total													
		衛研		病院		衛研		病院		衛研		病院			衛研		病院										
溶連菌症	分離施設別													衛 病													
	Group - G	0	4	0	3	0	4	0	1	0	0	0			1	3	2	1	0	19							
	Other or UT	0	20	0	10	0	6	0	7	0	1	0	5		9	6	9	5	13	0	97						
	Total	12	57	11	40	9	49	11	17	6	20	11	34	3	26	3	33	7	26	13	35	29	52	17	71	132	460
百日咳	検 体 数	4	2	0	2	0	0	0	3	1													12				
異肺型炎	陽 性 数													0													
	検 体 数													7													
	陽 性 数													7													
食 中 毒													15/29	22/35	8/31	分離株数 45/95 検体数											
その他	S. pneumoniae	5	33	8	28	6	38	0	18	0	25	1	20	23	13	17	24	25	22	20	286						
	H. influenzae	15	29	0	44	6	25	16	34	2	29	0	33	27	30	26	17	28	2	25	41	347					
	N. gonorrhoeae		2		3		6		1		9		1		1	4	5	7	6	2	0	48					
	K. pneumoniae				39		74		76		69		116		1	2	118		74		99		68		73	0	908
	B. cereus								3		2		2		3										1	0	11
	A. hydrophila/sobria														1	1									1	1	2
分離菌 検体数	Total	80	171	53	190	109	263	69	221	67	264	80	290	51	272	35	267	84	198	74	221	73	213	66	258	841	2,828
	Total	152	107	121	103	95	126	88	65	98	118	98	118	98	118	98	142									1,313	

※ 4のうち赤痢アメーバが2。

サーベイランス検体数	分離菌株数
下痢症	510
百日咳	12
溶連菌症	353
異型肺炎	7
小計	882
環境疫学調査	336
学童保菌調査	437
小計	773
合計	1,655
	774

各疾病別分離状況は次のとおりである。

(1) 溶連菌感染症

a 月別、疫病別検体数(表3)

表3 月別・疾病別検体数

疾病	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	合計(%)
溶連菌感染症		20	16	16	14	8	17	7	4	9	19	36	27	193(52.2)
気管支炎		5		1			1						3	10(2.7)
扁桃炎				1		1		1		1		4	2	10(2.7)
風邪				1			3					4	4	12(3.2)
インフルエンザ			14		1								3	18(4.9)
百日咳		4	2		2			3	1		1			13(3.5)
異型肺炎					1			1					3	5(1.3)
ヘルパンギーナ						2								2(0.5)
その他		51	11	3	8	11	2	4		1	1	3	12	107(29.0)
合計		80	43	22	26	22	23	16	5	11	21	47	54	370(100.0)

検体数 370 検体で溶連菌感染症が 193 件 (52.2%) で
 半数を占め、その他の疾病は 1~3% ずつであった。流
 行と共に検体数も初冬~翌年春季にかけて多く、夏季に

少い。
 b 溶連菌の月別分離状況および T 型別

表 4 月別・T 型別

群	T 型	月												合計 (%)
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
A 群	1	2			3	1	1				1	1	1	10 (7.6)
	3											1		1 (0.8)
	4	1	1	3	3	1	1	2	1	3	11	16	10	53 (40.5)
	6				3	1	3			1			2	10 (7.6)
	12	6	6	5		1	5	1	1	3	1	7	2	38 (29.0)
	13	1	2			2	1		1			3	2	12 (9.2)
小計		10	9	8	9	6	11	3	3	7	13	28	17	124 (94.7)
B 群		2	2	1	2									7 (5.3)
合計		12	11	9	11	6	11	3	3	7	13	28	17	131 (100.0)

表 5 疾病別・溶連菌 T 型別

疾病別	群 T 型	A 群						B 群	合計 (%)
		1	3	4	6	12	13		
溶連菌感染症		9		47	10	30	11	4	111 (84.7)
扁桃炎						2			2 (1.5)
風邪				4					4 (3.1)
インフルエンザ						1		1	2 (1.5)
百日咳								1	1 (0.8)
その他		1	1	2		5	1	1	11 (8.4)
合計		10	1	53	10	38	12	7	131 (100.0)

サーベイランス検体 353 件よりの分離数は 131 株で、
 A 群が 124 株 94.7% と大部分を占め、B 群 7 株 5.3% の
 ほか C、G 群等は分離されなかった (表 4)。

A 群の T 型別では 4 型が 53 株 (40.5%) と首位になり、
 12 型は 38 株 (29.0%) と減少した。これは晩秋から初冬に
 かけての流行時に 4 型が 37 株分離されたのに対し、12 型
 は 10 株と少く、数年来 12 型首位のパターンが続いたが、

初めて首位に変動を生じた。その他 13 型 (9.2%)、1 型
 (7.6%)、6 型 (7.6%) などが多く、昨年とほぼ同様のパ
 ターンであった。

疾病との関連では、溶連菌感染症から A 群 111 株
 (84.7%) と最も多く分離され、4 型、12 型、13 型、1
 型、6 型の順に分離された。

c 分離溶連菌の薬剤感受性

表 6 溶連菌の感受性検査

薬剤	SB・PC	AB・PC	CB・PC	CER	CEx	CET	TC	DoT	MnO	CM	EM	KM	LCM
	+++	122	88	124	124	123	122	71	84	19	112	104	
++		1						24	34	19	2		5
+							29	4	2		2	63	2
-	2				1						4	56	2
感受性 (%)	122 (98)	89 (100)	124 (100)	124 (100)	123 (99)	122 (100)	95 (77)	118 (97)	38 (95)	124 (100)	104 (95)	5 (4)	80 (95)
耐性 (%)	2 (2)				1 (1)		29 (23)	4 (3)	2 (5)		6 (5)	119 (96)	4 (5)
検査株数	124												

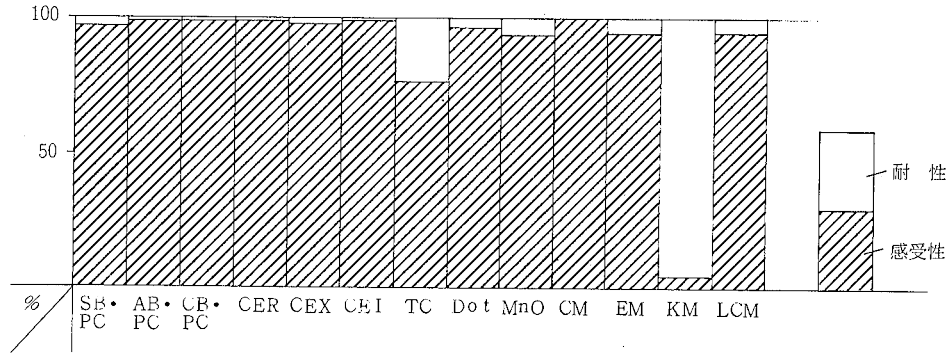


図3 分離溶連菌の薬剤感受性

分離溶連菌のうち124株についてDisc法による感受性試験を行った。使用薬剤は13種類で合成ペニシリン系、セファロスポリン系はほとんど全株感受性を示した。KMは昨年の耐性は62.1%であったが96%とさらに進み、

TCは12型の減少とともに耐性株も減少し23%（昨年34.3%）であった。そのほかEM, L M, Mno などに2~5%の耐性株がみられた（表6, 図3）。

d 年齢別溶連菌分離状況

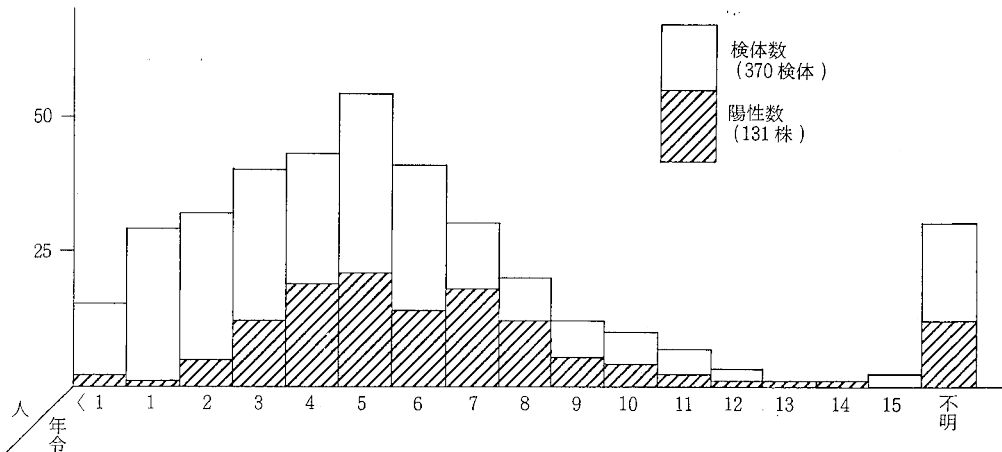


図4 年齢別・溶連菌陽性数

総数370検体の年齢分布は0歳~15歳にわたり、7歳までが284検体76.7%を占め、その分離率も70.7%と高く、患者の年齢分布とよい相関がみられる（図4）。

e 健康学童の溶連菌保菌調査

都市部として高松市内M小学校、山間部として塩ノ江町S小学校児童を対象に3年、4年生各40名を各季節ごとに昨年に引き続いて保菌調査を行った。市内M小学校では昨年11月に1型の検出が高かったが58年度には6月、9月に6型が多く検出されている。一般に昨年に比べて6月、9月の分離率が高い傾向がみられた。山間部のS小学校でも同様の傾向がみられ、とくに2月における検出率に著明な差があり、分離株中同一血清型が50%を越したのは6月のB群、9月の13型、11月の13型であり、M小学校の6~9月における6型、S小学校における9

~11月の13型流行が推定される。

全体の保菌率は昨年度と同様11~2月の冬季に高く、6~9月は低い傾向であるが、本年は春~夏にかけて昨年より高い保菌率を示している。またM小学校は57年度分離率19.5%、58年度33.1%、平均28.2%で、S小学校はそれぞれ26.5%、39.3%、平均32.5%でやや高い保菌率であった。患者分離株に多い4型、12型、13型はM小学校8.4%、10.5%、5.3%で、S小学校は0%、6.8%、47.5%でやや低率であるが、S小学校の13型は高率であった（図5）。

f 情報協力7病院における溶連菌分離状況

分離株総数は460株で昨年より66株多く、月別分離状況はサーベイランスと同一パターンを示している。昨年と比較すると型別不能株が40.6%から21.1%と大幅に

減少し、A群が25.6%から39.8%、B群が15.5%から27.0%と増加している。C群、G群には著変はみられない(表7)。

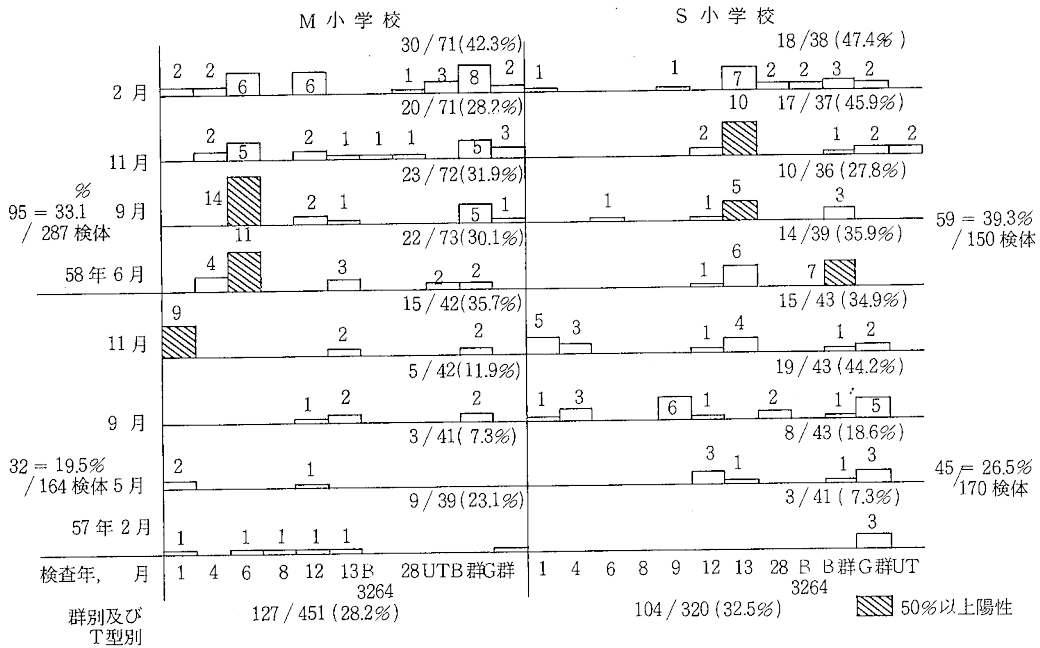


図5 健康学童における溶連菌疫学調査

表7 情報協力7病院における溶連菌分離状況

群別	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計	%	57年	
																分離数	%
A群		15	9	15	6	6	17	10	18	3	14	29	39	183	39.8	101	25.6
B群		14	14	16	2	8	10	6	7	10	10	12	15	124	27.0	61	15.5
C群		4	4	8	1	3	2	1	2	3	2	4	3	37	8.0	55	14.0
G群		4	3	4	1	0	0	0	0	1	3	2	1	19	4.1	17	4.3
型別不能		20	10	6	7	1	5	9	6	9	6	5	13	97	21.1	160	40.6
合計		57	40	49	17	20	34	26	33	26	35	52	71	460	100.0	394	100.0
%		12.4	8.7	10.7	3.7	4.3	7.4	5.7	7.2	5.7	7.6	11.3	15.4	100.0			

(2) 感染性下痢症

表8 昭和58年 下痢症の月別検体数および分離細菌

検体数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	合計	57年	56年
	C.jejuni/coli	44	37	70	49	45	75	44	32	30	32	23			
%	18.2	8.1	24.3	38.8	55.6	42.7	9.1	25.0	26.9	25.0	52.2	37.9	30.4	37.8	32.9
Salmonella	4	9	8	0	5	0	7	7	2	3	1	0	46	45	13
%	9.1	24.3	11.4	0.0	11.4	0.0	15.9	21.9	6.7	9.4	4.4	0.0	9.0	7.4	2.3
E.coli	4	4	9	2	2	5	3	0	4	1	3	4	41	30	23
%	9.1	10.8	12.9	4.1	4.4	6.7	6.8	0.0	13.3	3.1	13.0	13.8	8.0	5.0	4.0
S.aureus	5	0	12	6	4	4	1	5	0	1	4	5	47	28	12
%	11.4	0.0	17.1	12.2	8.9	5.3	2.3	15.6	0.0	3.1	17.4	17.2	9.2	4.6	2.1

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	合計	57年	56年
K.oxytoca	2	2	3	4	1	2	0	0	0	1	0	0	15	11	14
%	4.6	5.4	17.7	8.2	2.2	2.7	0.0	0.0	0.0	3.1	0.0	0.0	2.9	1.8	2.5
V.parahaemolyticus	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	2	-	-
P.aeruginosa	-	-	-	1	1	1	1	3	5	-	-	-	12	6	-
A.hydrophila/sobria	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	1	-
合計	23	18	49	32	38	44	16	24	21	14	20	20	319	338	249
%	52.3	48.6	70.0	65.3	84.4	58.7	36.4	75.0	70.0	43.8	87.0	69.0	62.5	55.8	43.6

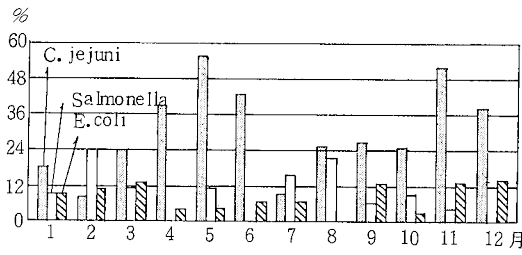


図 6-1 S.58年 下痢症よりの主な分離細菌

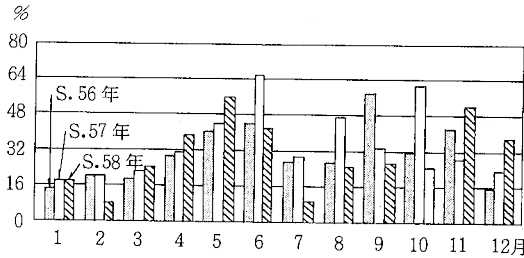


図 6-2 3年間の C. jejuni の分離状況

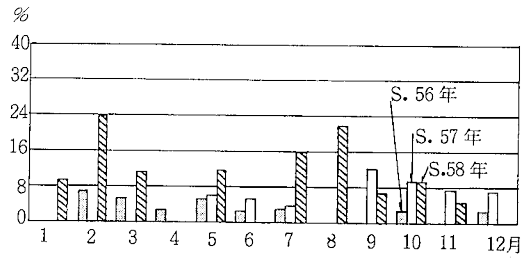


図 6-3 3年間の Salmonell 分離状況

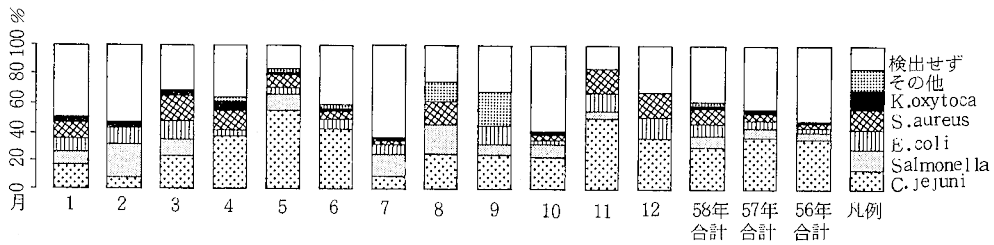


図 6-5 下痢症よりの月別検出状況

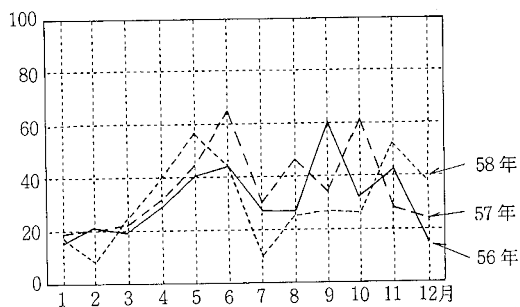


図7 C. jejuni/coli の検出状況

細菌検査を行った下痢症検体は510件で昨年より約100件少く、時期的には8~12月にかけて減少している。月別検体数および病原菌分離状況は C. jejuni/coli 30.4%, Salmonella 9.0%, E. coli 8.0%, S. aureus 9.2%, K. oxytoca 2.9% などが主で、その

ほか V. parahaemolyticus 2株, A. hydrophila/sobria 1株が分離されている。なお, S. aureus, P. aeruginosa, K. oxytoca などは稀釈培養で 10^{-5-6} 以上で検出された件数である(表8, 図6-5, 図6-1)。

主要細菌の分離状況は次のとおりである。

a C. jejuni/coli

510検体中155株(30.4%)が分離され、昨年(37.8%)よりやや低下したが、4年間の平均分離率は32.4%と最も高率である。月別分離状況は4月~6月, 8月下旬~11月の春秋に高く、盛夏の7~8月中旬, 冬季には低い傾向がみられる。3年間の年別, 月別分離状況はほぼ同一パターンを示している(図6-2, 図7)。

薬剤感受性は9種の薬剤について分離54株を供試したが, NA, KM, EM, Doxy, GMには100%感受性で, CEZ, CEXには100~85.2%, AB-PC 5.6%, TCに3.7%ではほぼ昨年同様の成績であった(表9, 図8)。

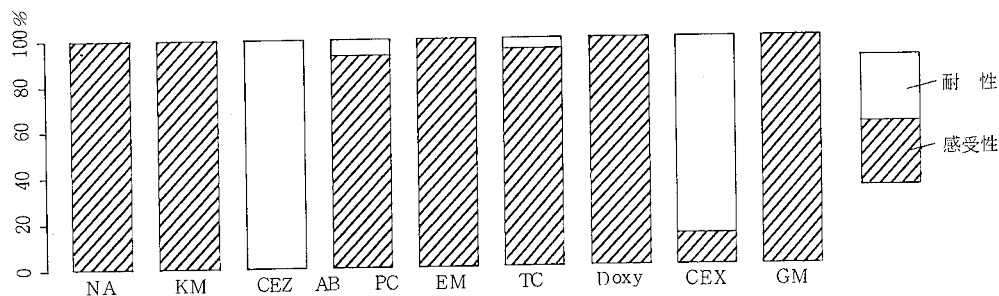


図8 C. jejuni/coli の薬剤感受性

表9 C. jejuni/coli の薬剤感受性

成績		薬剤	NA	KM	CEZ	ABPC	EM	TC	DOXY	CEX	GM
感受性	+++		53	51		46	52	45	54	1	54
	++		1	3		5		7		7	
	+					1		2		3	
	-				50	2				43	
検体数		54	54	50	54	52	54	54	54	54	54
感受性	%		54	54	—	51	52	52	54	8	54
			100	100		94.4	100	96.3	100	14.8	100
耐性	%		—	—	50	3	—	2	—	46	—
					100	5.6		3.7		85.2	

表10 C. jejuni/coli の年齢別検出状況 (S.58年)

患者数	年齢													不明	計
	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
男 (陽性)	35	51	38	38	19	30	20	21	11	13	7	5	2	23	313
女 (陽性)	24	27	18	24	11	20	20	14	9	5	1	1	2	21	197
計 (陽性)	59	78	56	62	30	50	40	35	20	18	8	6	4	44	510
%	14.3	13.7	36.8	42.1	21.1	33.3	50.0	28.6	36.4	61.5	57.1	60.0	50.0	21.7	31.0
%	16.7	18.5	44.4	37.5	27.3	35.0	35.0	50.0	44.4	—	—	100	50.0	9.5	29.4
%	9	12	22	25	7	17	17	13	8	8	4	4	2	7	155
%	15.3	15.4	39.3	40.3	23.3	34.0	42.5	37.1	40.0	44.4	50.0	66.6	50.0	15.9	30.4

表12 C. jejuni/coli の年齢別分離状況 (S.55～S.58年)

年齢区分	年齢															不明	合計	
	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14			15
検査数	202	237	194	200	158	161	124	102	57	60	34	24	10	5	4	2	108	1682
陽性数	41	59	77	74	63	61	53	42	25	33	13	10	4	2	2	0	16	575
分離率	20.3	24.9	39.7	37.0	39.9	37.9	42.7	41.2	43.9	55.0	38.2	41.7	40.0	40.0	50.0	—	14.8	34.2

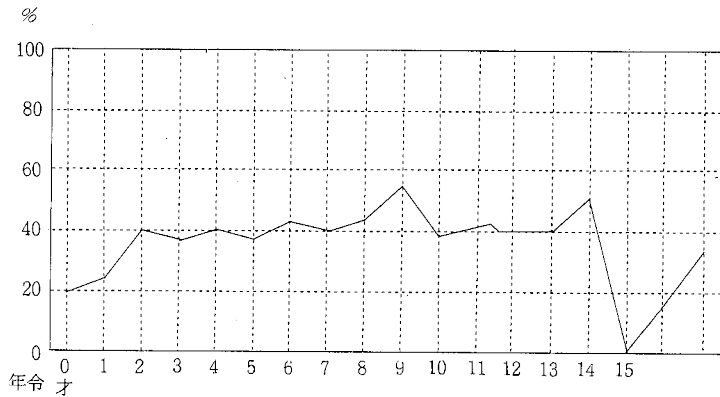


図9 C. jejuni/coli の年齢別分離率 (S.55～58年の平均)

年齢別分離状況は0歳～1歳が15%とやや低いが、2歳～14歳は23～50%で大差なく平均30.4%の分離率で、男女差もみられない(表10)。S.55～58年4年間の合計では1,682検体の平均分離率34.2%、0～1歳が20.3～24.9%、2歳～14歳38.2%～55%で同様の年齢分布を示している(表11, 図9)。

b Salmonella

S.58年度の分離率は46/510 9.0%で、最近3年間に2.3%→7.4%→9.0%と次第に高くなっている。この傾向は7病院での分離数も同様で57株→115株→180株となっている。分離株の血清型はB群が80.4%と大部分を占め、C群6.5%、D群10.9%、その他の群2.2%とな

っており、同定依頼株を含めた7病院分離株ではB群66.7%、C₁群11.1%、C₂群11.7%、D₁群5.6%、その他の群4.9%ではほぼ同様の傾向を示しているが、やや異っている点はサーベイランス検体ではC₂群が検出されなかったこと、S. paratyphi B (d-tartrate陽性)が病院分離に多い点であるが、これは西讃で7月下旬から8月上旬にかけて集中的に分離されており、ファージ型も1型のみで小流行のあったことが推定される。昨年来急増している S. typhimurium は本年も全分離株数の半数以上を占め、年間を通じて分離されている。そのほか、S. enteritidis, S. litchfield は6.6%, 6.2%と昨年と同様であり、S. virchow 0.8%→3.1%, S.

schwarzengrund 0.8%→4.4%とやゝ増加している。なお腸チフスの発生が1件もなく、河川、下水等の環境疫学調査でも分離されなかった。また S. paratyphi A が2月に分離されたが感染源は不明であった。なお、河

川水、下水からは分離されていたが、人下痢症からは従来分離されなかったA～E群以外のO群も分離され始め、G群2株、I群、K群、L群が各々1株分離された(表12、図6-3)。

表12 昭和58年 Salmonella 検出状況

分離月	サーベイ検出状況												合計	%	病室(7)検出状況(同定依頼104株を含む)												合計	%	総計	%	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12					
検体数	44	37	70	49	45	75	44	32	30	32	23	29	510																		
B	S. typhimurium	2	9	6	-	5	-	2	6	-	2	1	-	33	71.7	11	7	14	10	7	10	7	10	6	3	3	2	90	50.0	123	54.4
	S. schwarzengrund			2										2	4.4			6	2								8	4.4	10	4.4	
	S. paratyphi B(d+)							1						1	2.2					7	12						19	10.6	20	8.9	
	S. sofia													0	-					1							1	0.6	1	0.4	
	S. agona								1					1	2.2							1					1	0.6	2	0.9	
	S. kisangani													0	-							1					1	0.6	1	0.4	
	小計													37	80.4												128	66.7	157	69.5	
C1	S. infantis	2											2	4.4					3		1	1				5	2.8	7	3.1		
	S. montevideo												0	-			1									1	0.6	1	0.4		
	S. virchow												0	-				1		6						7	3.9	7	3.1		
	S. potsdam								1				1	2.2							1					1	0.6	2	0.9		
	S. larochelle												0	-					2							2	1.1	2	0.9		
	S. braenderup												0	-								1				1	0.6	1	0.4		
	S. bareilly												0	-										1		1	0.6	1	0.4		
	S. tennessee												0	-											1	1	0.6	1	0.4		
	S. richmond												0	-									1			1	0.6	1	0.4		
	小計												3	6.5												20	11.1	23	10.2		
C2	S. litchfield											0	-			3	1	2	1	2	3	1	1		14	7.9	14	6.2			
	S. newport											0	-			1						3			4	2.2	4	1.8			
	小計											0	-			3	(不明)								21	11.7	21	9.3			
D	S. enteritidis							5				5	10.9							5	4		1		10	5.6	15	6.6			
E	S. give											0	-						1						1	0.6	1	0.4			
	S. london											0	-			2									2	1.1	2	0.9			
	S. muenster											0	-		1										1	0.6	1	0.4			
G K A	U T								1			1	2.2									1			1	0.6	2	0.9			
	S. cerro											0	-									1			1	0.6	1	0.4			
	S. paratyphi A											0	-		3										3	1.7	3	1.3			
合計	4	9	8	0	5	0	8	7	2	2	1	0	45	100.0	11	11	23	16	13	13	26	38	15	6	5	3	183	100.0	226	100.0	
分離率	9.1	24.3	11.4	-	11.1	-	18.2	21.9	6.7	6.3	4.4	-	9.0																		

表13 香川県における分離 Salmonella の血清型 (S.53～S.58)

O群	血清型	1978		1979		1980		1981		1982		1983	
		数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
B	S. typhimurim	2	10.5	16	41.0	19	35.9	9	13.0	61	51.3	123	54.4
	S. paratyphi B(d+)	1	5.3	1	2.6	-	-	3	14.4	5	4.2	20	8.9
	S. sofia	-	-	1	2.6	4	7.6	2	2.9	-	-	1	0.4
	S. derby	2	10.5	6	15.4	-	-	-	-	-	-	-	-
	S. saint paul	1	5.3	-	-	-	-	3	4.4	1	0.8	-	-
	S. schwarzengrund	-	-	-	-	-	-	-	-	1	0.8	10	4.4
	S. agona	-	-	-	-	-	-	12	17.4	-	-	2	0.9
	S. stanley	-	-	-	-	-	-	1	1.5	-	-	-	-

O群	血清型	1978		1979		1980		1981		1982		1983	
		数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
B	S. bredeney	-	-	-	-	-	-	-	-	10	8.4	-	-
	S. chester	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1.7	-	-
	S. kisangani	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	0.4
	小計	6	31.6	24	61.5	23	43.4	30	43.5	80	67.2	157	69.5
C ₁	S. infantis	3	15.8	2	5.1	1	1.9	1	1.4	2	1.7	7	3.1
	S. thompson	-	-	2	5.1	8	15.1	1	1.4	4	3.4	-	-
	S. richmond	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	0.4
	S. bonn	-	-	2	5.1	-	-	-	-	-	-	-	-
	S. larochele	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	0.9
	S. livingston	-	-	-	-	1	1.9	-	-	-	-	-	-
	S. bareilly	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	0.4
	S. potsdam	3	15.8	-	-	-	-	4	5.7	-	-	2	0.9
	S. tennessee	-	-	-	-	1	1.9	3	4.3	2	1.7	1	0.4
	S. braenderup	-	-	-	-	-	-	2	2.9	-	-	1	0.4
	S. virchow	-	-	-	-	1	1.9	-	-	1	0.8	7	3.1
	S. oslo	-	-	-	-	-	-	1	1.4	-	-	-	-
	S. montevideo	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	0.4
	小計	6	31.6	6	15.4	12	22.6	12	17.4	9	7.6	23	10.2
C ₂	S. nagoya	-	-	1	2.6	-	-	-	-	-	-	-	-
	S. lichfield	-	-	1	2.6	3	5.7	18	25.7	6	5.0	14	6.2
	S. manhattan	2	10.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	S. muenchen	-	-	-	-	2	3.8	-	-	1	0.8	-	-
	S. newport	-	-	-	-	1	1.9	1	1.4	3	2.5	4	1.8
	S. manchester	-	-	-	-	-	-	-	-	1	0.8	-	-
	U T 小計	2	10.5	2	5.1	6	11.3	19	27.1	11	9.2	21	9.3
D	S. typhi	5	26.3	4	10.3	9	17.0	5	7.3	6	5.0	-	-
	S. enteritidis	-	-	-	-	-	-	2	2.9	8	6.7	15	6.6
	S. panama	-	-	-	-	-	-	-	-	4	3.4	-	-
	S. javiana	-	-	-	-	-	-	1	1.5	-	-	-	-
小計	5	26.3	4	10.3	9	17.0	8	11.6	18	15.1	15	6.6	
E	S. london	-	-	-	-	1	1.9	-	-	-	-	2	0.9
	S. give	-	-	2	5.1	-	-	-	-	-	-	1	0.4
	S. newington	-	-	-	-	-	-	1	1.5	-	-	-	-
	S. muenster	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	0.4
	S. portsmouth	-	-	-	-	-	-	-	-	1	0.8	-	-
	S. senftenberg	-	-	1	2.6	-	-	-	-	-	-	-	-
小計	-	-	3	7.7	1	1.9	1	1.5	1	0.8	4	1.8	
G	U T	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	0.9
I	S. salford	-	-	-	-	1	1.9	-	-	-	-	-	-
K	S. cerro	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	0.4
L	S. baguida	-	-	-	-	1	1.9	-	-	-	-	-	-
A	S. paratyphi A	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	1.3
	合計	19		39		53		70		119		226	

なお、S.53年～S.58年の6年間に人下痢症より分離された Salmonella の血清型は表13に示すとおりで、B群が最も多く、とくにS. typhimurium はS. 56年を除いて圧倒的多数を占めている。C₁群ではS. infantis, S. Thompson, S. virchow, C₂群ではS. litchfield

が継続して毎年分離され、D群ではS. typhi が昨年を除いて毎年分離され、S. enteritidis もS. 56年以来増加がみられる。E群は少く、G群、J群、K群など従来未分離のO群が分離され始めた(表13)。
付 環境疫学調査

表14 環境疫学調査

調 査 月		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	合計	分離率	56年		57年	
定 点 数		28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	336	%	324			
Shigella		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	0 -		0 -	
Salmonella	B 群	7	6	5	3	3	1	6	0	19	9	5	2	66	14.4 ※40.2	47	25.8	106	43.1
	C ₁ 群	9	4	3	3	1	0	10	1	9	5	1	4	50	10.9 30.5	42	23.1	65	26.4
	C ₂ 群	3	0	0	0	1	0	3	1	4	5	4	1	22	4.8 13.4	54	29.7	20	8.1
	D 群	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1	3	0.7 1.1	11	6.1	7	2.9
	E 群	0	0	2	0	0	0	2	0	7	2	1	1	14	3.1 8.5	20	11.0	21	8.5
そ の 他		0	0	0	1	0	0	0	1	5	0	2	0	9	2.0 5.5	8	4.4	2	11.0
小 計		19	10	9	8	5	1	21	3	44	21	14	9	164	35.7 100.0	182	100.0	246	100.0
V. cholerae O-1		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	0 -		0 -	
V. cholerae non O-1		0	1	0	2	17	20	7	8	2	2	0	0	59	12.9	26	11.9	124	23.9
V. fluvialis		10	1	12	1	0	4	4	0	0	3	10	10	55	11.9	11	5.0	48	9.3
Y. enterocolitica		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-			2	0.4
P. shigelloides		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-			1	0.2
C. jejuni/coli		3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0.7			1	0.2
P. aeruginosa		9	15	18	21	11	16	9	14	15	18	15	17	178	38.8			96	18.5
総 計		41	27	41	32	33	41	41	25	61	44	38	36	459	100.0	219		518	

※ Salmonella 分離数に対する%

表15 環境より分離された Salmonella の血清型

O群	血 清 型	55年		56年		57年		58年	
		分離数	%	分離数	%	分離数	%	分離数	%
B	S. typhimurim	8	6.2	7	3.3	27	11.0	22	13.4
	S. sofia	9	7.0	8	4.4	4	1.6	4	2.4
	S. derby	1	0.8	8	4.4	15	6.1	2	1.2
	S. java	6	4.7	9	4.9	4	1.6	2	1.2
	S. agona	5	3.9	9	4.9	5	2.0	19	11.6
	S. schwarzengrund	-		-		-		6	3.7
	S. heidelberg	-		2	1.1	5	2.0	1	0.6
	S. saint-paul	-		2	1.1	7	2.9	-	
	S. stanley	1	0.8	-		2	0.8	-	
	S. hato	-		1	0.6	1	0.4	1	0.6
	S. duisburg	-		1	0.6	-		-	
	S. bradford	-		-		1	0.4	2	1.2
	S. brandenburg	-		-		2	0.8	-	
	S. essen	-		-		1	0.4	-	
	S. chester	-		-		7	2.9	-	
	S. kingston	-		-		1	0.4	-	
	S. bredeny	-		-		12	4.9	-	
	S. indiana	-		-		-		1	0.6
	S. kiambu	-		-		-		1	0.6
	U T	-		-		12	4.9	5	3.0
小 計		30	23.3	47	25.8	106	43.1	66	40.2

O群	血清型	55年		56年		57年		58年	
		分離数	%	分離数	%	分離数	%	分離数	%
C ₁	S. infantis	17	13.2	6	3.3	21	8.5	19	11.6
	S. thompson	9	7.0	3	1.6	4	1.6	9	5.5
	S. potsdam	21	16.3	2	1.1	6	2.4	4	2.4
	S. tennessee	8	6.2	2	1.1	9	3.7	3	1.8
	S. bareilly	6	4.7	2	1.1	9	3.7	2	1.2
	S. livingston	4	3.1	4	2.2	2	0.8		
	S. montevideo	3	2.3	1	0.6	-		2	1.2
	S. brazzaville	3	2.3	-		-		-	
	S. bon	-		-		-		-	
	S. lomita	3	2.3	1	0.6	-		-	
	S. braenderup	2	1.6	5	2.8	-		1	0.6
	S. isangi	1	0.8	4	2.2	1	0.4	-	
	S. virchow	-		-		-		1	0.6
	S. oslo	-		6	3.3	-		-	
	S. ohio	-		3	1.6	1	0.4	2	1.2
	S. mikawasima	-		3	1.6	1	0.4	-	
	S. singapore	-		-		-		-	
	S. irum	-		-		1	0.4	1	0.6
	S. kivu	-		-		1	0.4	1	0.6
	S. minion	-		-		1	0.4	-	
	S. gabon	-		-		1	0.4	-	
	S. baiboukoum	-		-		1	0.4	-	
	S. mission	-		-		1	0.4	-	
	S. oritamerin	-		-		-		1	0.6
	S. larochella	-		-		-		1	0.6
	S. concord	-		-		-		1	0.6
S. acquatoria	-		-		-		1	0.6	
U T	-		-		5	2.0	1	0.6	
小計		77	59.7	42	23.1	65	26.4	50	30.5
C ₂	S. nagoya	-		1	0.6	3	1.2	-	
	S. lichfield	-		42	23.1	8	3.3	8	4.9
	S. nanergou	1	0.8	-		-		-	
	S. blockley	1	0.8	-		1	0.4	1	0.6
	S. chincol	1	0.8	-		-		1	0.6
	S. muencol	-		1	0.6	3	1.2	2	1.2
	S. newport	-		-		3	1.2	1	0.6
	S. praha	-		1	0.6	-		-	
	S. takaradi	-		-		-		1	0.6
	S. tallahassee	-		-		-		1	0.6
	S. chailey	-		-		-		2	1.2
	S. loanda	-		-		-		1	0.6
	S. edomonton	-		-		-		1	0.6
	S. bovis-morbificans	-		-		-		1	0.6
	U T	1	0.8	9	4.9	2	0.8	2	1.2
小計	4	3.1	54	29.7	20	8.1	22	13.4	
D	S. typhi	1	0.8	9	4.9	2	0.4	-	
	S. panama	-		1	0.6	1	0.4	2	1.2
	S. enteritidis	-		1	0.6	4	1.6	1	1.6
E ₁	S. anatum	6	4.7	2	1.1	2	0.8	-	
	S. mereagris	2	1.6	-		-		2	1.2

O群	血清型	55年		56年		57年		58年	
		分離数	%	分離数	%	分離数	%	分離数	%
E ₁	S. london	2	1.6	-	-	1	0.4	-	-
	S. give	-	-	2	1.1	9	3.3	-	-
	S. zanzibar	-	-	2	1.1	1	0.4	-	-
	S. amsterdam	-	-	-	-	1	0.4	-	-
	S. seegefeld	-	-	-	-	1	0.4	-	-
	U T	-	-	1	0.6	1	0.4	-	-
E ₂	S. newington	6	4.7	2	1.1	-	-	-	-
	S. drypool	-	-	5	2.8	3	1.2	5	3.0
	S. portsmouth	-	-	-	-	-	-	-	-
E ₄	S. senftenberg	1	1.8	1	0.6	3	1.2	3	1.8
	S. liverpool	-	-	4	2.3	-	-	2	1.2
	S. kande	-	-	1	0.6	-	-	-	-
	U T	-	-	-	-	1	0.4	-	-
	S. krefeld	-	-	-	-	-	-	1	0.6
G	S. havana	-	-	-	-	5	2.0	1	0.6
	S. vuldelus	-	-	-	-	1	0.4	-	-
	S. rans	-	-	-	-	-	-	2	1.2
	U T	-	-	-	-	3	1.2	5	3.0
K	S. cerro	-	-	6	3.3	10	4.1	1	0.6
	S. blukwa	-	-	1	0.6	-	-	-	-
	S. usumbura	-	-	-	-	2	0.3	-	-
	S. langenhorn	-	-	-	-	-	-	1	0.6
	U T	-	-	1	0.6	-	-	-	-
L	S. baguida	1	0.8	-	-	-	-	-	-
	A rizona	-	-	-	-	5	2.0	-	-
総計		129	100.0	182	100.0	246	100.0	164	100.0

病原微生物の環境汚染は人、動物、食品由来のものも多く、再び人へとリサイクルされる場合もしばしば生ずる。流行予測、確認、感染源追求などの手段として、環境疫学調査は各地で行われているが、とくに都市下水、都市河川水生糞尿とともに、生活廃水や産業廃水を含み、腸管病原微生物の感染源、流行菌型の把握に適当な対象であり、昨年同様県下4市の下水、河川水に28定点を設け、毎月1回定期的に調査を行った。

S.58年の延調査定点数は336地点で、総計459株が分離された。主な分離菌は次のとおりである。

Salmonella：分離総数164株、分離率35.7%で昨年より82株減少した。これは3～5月の春季に分離率が低かったためで、これは人下痢症においても同様であった。Salmonellaは28定点すべてから分離されている。血清型はB群66株(40.2%)で昨年よりやや減少している

が本年も首位を占め、ついでC₁群50株(30.5%)、C₂群22株(13.4%)、E群14株(8.5%)であり、D群は3株(1.9%)と少く、S. Typhiは分離されなかった。その他のO群は9株(5.5%)である。それぞれの血清型を昨年と比較するとS. Typhimuriumが13.4%で昨年同様首位を占め、S. agona、S. infantisが11.6%と増加傾向にある。そのほかS. schwarzengrund、S. Thompson、S. litchfield、S. drypoolが増加し、S. derby、S. tennessee、S. bareillyなどがやや減少した。新しく分離された血清型は6群15菌型でC₁、C₂群に多かった。

Vibrio：01 Vibrio choleraeは分離されず、non 01 Vibrio choleraeは59株(12.9%)と昨年の約半数に減少し、V. fluvialisは昨年とほぼ同数の55株(11.9%)が分離された。なお両菌とも坂出地区の定点から主に分離された。

その他：Y. enterocolitica, P. shigelloides は分離されず，C. jejuni/coli が3株(0.7%) 分離された。P. aeruginosa は178株(38.8%) と毎月各定

り分離され、その血清型もA～Mの13血清型すべてにわたっている(表14, 15)。

c 病原大腸菌

表16 昭和58年 E. Coli の検出状況

分 離 月	サ ー ベ イ 検 出 状 況												合計	%	病 院 (7) 検 出 状 況												合計	%	総計	%
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12				
検 体 数	41	37	70	49	45	75	44	32	30	32	23	29	510																	
Coli-E	○124 : K 72												0		2							2	1	1	6		6	3.9		
	○112 : K 66			1		1							2												0		2	1.3		
	○28 : K 73					1							1								2				3		4	2.6		
	○144 : K x					1							1										1		1		2	1.3		
	○143 : K x							1	1				2							1			1		2		4	2.6		
	○164 : K +											2	2							1	1		1	1	4		6	3.9		
	○25 : K 1												0							1			1		2		2	1.3		
小 計			1	2	1	1	1				2	8	19.5		2		1	3	2		4	4	2	18	16.1	26	17.0			
Coli-Ec	○26 : K 60			4		1						5		1	2	2	1						1	3	10		15	9.8		
	○126 : K 71	1	1	1							1	4		2	2	3	2	3	1			2	2	4	21		25	16.3		
	○44 : K 74	1	1	1					2		1	6		2	1			3				1	1		8		14	9.2		
	○86 : K 62											0		2		1	1	1				2	1	1	3	12		12	7.8	
	○111 : K 58	1				1						2													2		4	2.6		
	○114 : K 90	1										1		1		1					2				2		3	2.0		
	○128 : K 67									1		1						1	1		1	1	1		5		6	3.9		
	○1 : K 51		1				1	1			1	4		2				1	1				1	2	7		11	7.2		
	○55 : K 59						1					1				1									2		3	2.0		
	○127 : K 63							1				1				1		1	1						3		4	2.6		
	○125 : K 70											0											1	2	7		7	4.6		
	○142 : K +								1			1										1		2	4		5	3.3		
	○119 : K 69						1					1										1			2		3	2.0		
	○146 : K 89										1	1													3		4	2.6		
	小 計	4	3	6		1	4	2		3	1	1	3	28	68.3	7	8	6	5	11	7	7	5	6	5	16	88	78.6	116	75.8
Coli-Ed	○159 : K 1		1	2								3			1										1		4	2.6		
	○148 : K +											0								2	2		1		5		5	3.3		
	○6 : K 15								1			1													0		1	0.7		
	○27 : K +										1	1													0		1	0.7		
小 計		1	2						1	1		5	12.2		1		2	2				1		6	5.4	11	7.2			
合 計	4	4	9	2	2	5	3	0	4	1	3	4	41		7	8	9	5	11	10	12	7	5	11	9	18	112		153	
分 離 率	9.1	10.8	12.9	4.1	4.4	6.7	6.8	-	13.3	3.1	13.0	13.8	8.0																	

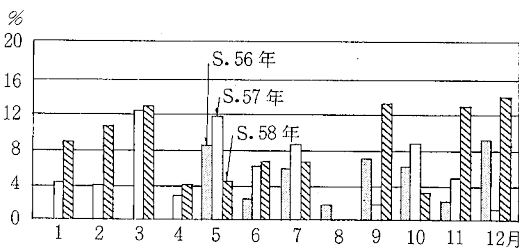


図6-4 3年間の E. coli 分離状況

下痢症から分離された病原大腸菌は41株、8.0% で昨年の5.0%よりやや増加している。41株のうちEIEC8株(19.5%)、EPEC28株(68.3%)、ETEC5株(12.2%)で、とくに多い血清型はなかった。病院分離株では

113株のうちEIEC18株(16.1%)、EPEC88株(78.6%)、ETEC6株(5.4%)ではほぼ同様の成績である。多くみられた血清型は0126 : K71(16.2%)、026 : K60(9.7%)、086 : K62(7.8%)などであった(表16, 図-4)。

d その他

赤痢の集団発生が同一保育所において3月に24名、5月16名、計40名の S. sonnei 1相菌による患者発生があり、うち30名から S. sonnei が分離された Coli-eine type はいずれも12型であった。そのほか10⁻⁵~⁶ 稀釈で S. aureus, K. oxytoca, などが、また少数ながら、V. parahaemolyticus, A. hydrophila/ sobria が分離された。

表17 下痢症より細菌・ウイルス同時検査成績

		ウイルス+細菌		ウイルスのみ		細菌のみ		陰性	
乳児嘔吐下痢症	24	2	8.3%	15	62.5%	2	8.3%	5	20.7%
仮性コレラ	16	5	31.2	6	37.5	0	—	5	31.3
感冒性消化不良	12	0	—	5	41.7	5	41.7	2	16.6
下痢症	9	0	—	2	22.2	4	44.4	3	33.4
流行性嘔吐下痢症	7	2	28.6	1	14.3	1	14.3	3	42.8
腸カタル	7	0	—	3	42.7	4	57.1	0	—
消化不良	6	0	—	1	16.7	2	33.3	3	50.0
その他	5	0	—	2	40.0	1	20.0	2	40.0
合計	86	9	10.5	35	40.7	19	22.1	23	26.7

- | | | | |
|--------------------------|----|------------------|-----|
| 1. ウイルス+細菌の検出されたもの | 9例 | 2. ウイルスのみ検出されたもの | 35例 |
| Rota virus + E. P. E. C. | 3例 | Rota virus | 31例 |
| " + S. aureus | 1 | Adeno-NT | 1 |
| " + Salmonella | 1 | Smoll particle | 3 |
| " + C. jejuni | 1 | 3. 細菌のみ検出されたもの | 19例 |
| " + C. jejuni | 1 | E. P. E. C. | 1 |
| " + Salmonella | 1 | E. T. E. C. | 1 |
| " + K. oxytoca | 1 | S. aureus | 8 |
| Adeno-NT + Salmonella | 1 | Salmonella | 5 |
| " + C. jejuni | 1 | K. oxytoca | 1 |
| | | C. jejuni | 5 |

DATA %

1.	24 : 27.9
2.	16 : 18.6
3.	12 : 14.0
4.	9 : 10.5
5.	7 : 8.1
6.	7 : 8.1
7.	6 : 7.0
8.	5 : 5.8

86

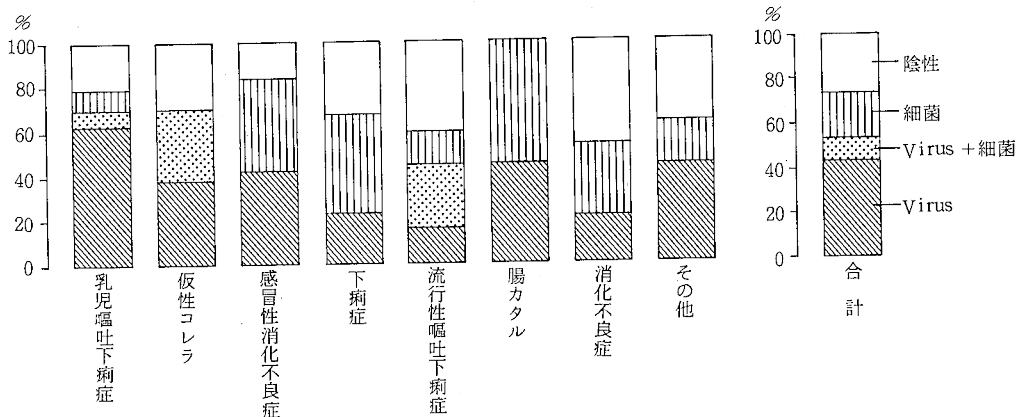
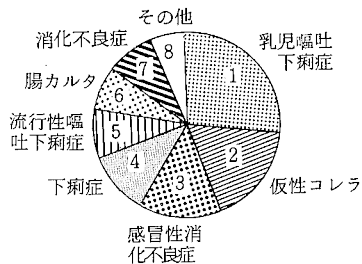


図 10

e 下痢症検体より細菌、ウイルス両者の検出事例

86検体について細菌、ウイルス両者の検査を行ったが、細菌とウイルスの両者が検出されたもの9件(10.5%)、ウイルスのみ検出されたもの35件(40.7%)、細菌のみ19件(22.1%)、両者共検出されない陰性のもの23件(26.7%)であった。両者共に検出された9事例はウイルスはRotavirusが8例、Adeno-NT 1例で、細菌はEPEC 3例のほか、Salmonella, C. jejuni, S. aureusなどが検出されている。なかにはAdeno-NT, Salmo-

nella, C. jejuni と3種類同時に検出されたものも1例みられた。臨床病名は乳児嘔吐下痢症、仮性コレラ、流行性嘔吐下痢症、下痢症、腸カタルなどで、主に秋～冬季に流行する疾患のため、Rotavirusの検出が多いが、細菌のみ検出された事例が22.1%あり、Salmonella 5, C. jejuni 5, EPEC 2などが主で、小児下痢症病因微生物の多様化を示している(表17, 図10)。

2) ウイルス関係

表18 月別・疾患別検体数(1983)

疾患別	月												計	%
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
上部呼吸器疾患	14	12	3	5	8	3	4	6	10	10	15	21	111	8.4
下部呼吸器疾患	11	15	5	8	6	5	8	9	9	8	6	10	100	7.6
部位不明呼吸器疾患	12		8	12	14	12	5	3	4	3	8	18	99	7.5
発熱疾患	2			4	2			1	3	2	2	7	23	1.7
ヘルパンギーナ		3		2	8	10	19	2	4	1	1		50	3.8
乳児嘔吐下痢症	36	44	43	19	12	12	5	4	5	14	11	43	248	18.6
流行性嘔吐下痢症	6	2	1	14	2					3	5	4	37	2.8
その他の下痢症	9	9	20	17	15	26	20	30	14	14	17	32	223	16.9
腸重積				1			2				1		4	0.3
出血性膀胱炎									1	3		1	5	0.4
口内炎	5			4	4	5	1	1	1	4			25	1.9
麻疹性疾患		1	7	9	3	3	3	3	2	7	5		43	3.3
手足口病	9	1	6	8	28	31	22	5	3	2			115	8.7
髄膜炎	1	5	2	1	3	9	13	20	17	34	1	2	108	8.2
眼疾						4			1	1			6	0.5
その他の疾患	6	4	5	4	4	9	13	4	4	10	5	15	83	6.3
不明疾患	2		2	5	2	4	1	1		2	17	6	42	3.2
計	113	96	102	113	111	133	116	89	78	118	94	159	1,322	100.0

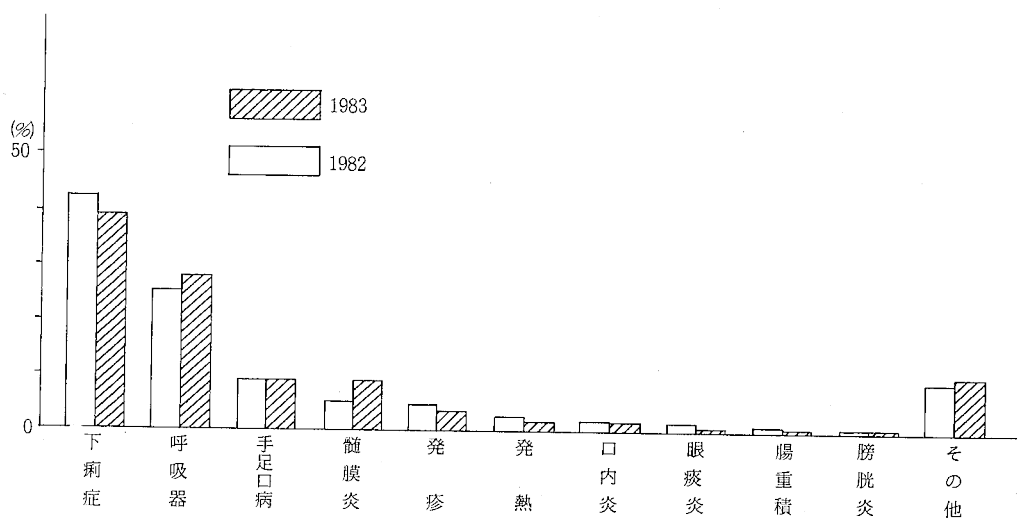


図11 疾患別年間検査材料

ウイルス関係の検体総数は1,322件で、疾患別検体の月別状況は表17に示したように、季節的特徴がみられ毎月100~150件の検体数があり、その大部分61.9%を下痢症、呼吸器疾患が占めている。流行形態をとった疾

患で検体数に反映したのはヘルパンギーナ、手足口病などの咽頭拭い液、下痢症の糞便、無菌性髄膜炎のリコールなどである(表18, 図11)。

a 月別ウイルス分離状況

表19 月別のウイルス分離(1983)

月	(A) 検体数	検査材料			(B) ウイルス分離数	ア デ ノ										Cox*A		エコー30	エンテロ71	C M V	H S V	R S	ロ タ	小型球状粒子				(B) (A) 分離率
		咽ぬぐい頭液	ふん便	その他		N T	1	2	3	5	6	8	4	5	カリシ	イオク	㊸							㊹				
1	113	62	51	46	1		2										6		4		32					1	40.7	
2	96	38	55	3	34		1											1		1	30	1					35.4	
3	102	34	63	5	40	4	40	4									1		5		28	1				1	39.2	
4	113	59	52	2	38		2	2				1					5	1	3	1	11			12			33.6	
5	111	75	31	5	41	3		4			1						19	1	3		7	1	2				36.9	
6	133	74	44	15	24	3		1					1				13		2	2			2				18.0	
7	116	75	30	11	9			1									3										7.8	
8	89	40	32	17	16	3	1	2									4	1		2	1			2			18.0	
9	78	49	19	10	15		1	3	5								5	1									19.2	
10	118	51	32	35	8	1		2									3			2							6.8	
11	94	59	35		14			3	2											1		4		3	1		14.9	
12	159	69	81	9	39	2		4	2	1										5		20		4		1	24.5	
計	1,322	685	525	112	324	17	4	25	9	2	1	1	4	1	12	49	3	27	5	132	3	25	1	3	3	24.5		

㊸30~35 nm粒子 ㊹25~30 nmの周縁なめらかな粒子

表20 疾患別ウイルス分離(1983)

疾患名	(A) 検体数	N T	ア デ ノ										エコー30	エンテロ71	C M V	H S V	R S	ロ タ	小型球状粒子				(B) 計	(B) (A) 分離率				
			1	2	3	5	6	8	4	5	カリシ	イオク							㊸	㊹								
上部呼吸器疾患	111		1	12	4										1	3	1									22	19.8	
下部呼吸器疾患	100			2	1		1								3	1										8	8.0	
部位不明呼吸器疾患	99	2	1	4	1	1									2											11	11.1	
発熱疾患	23			1																						1	4.3	
ヘルパンギーナ	50											4	1		1	3	1									10	20.0	
乳児嘔吐下痢症	248	10		2															100		4	8	2	9	2	125	50.4	
流行性嘔吐下痢症	37		2																							14	37.8	
その他の下痢症	223	5		1	1																25		6		1	39	17.5	
腸重積	4																										—	—
出血性膀胱炎	5																										—	—
口内炎	25																		9							9	36.0	
発疹性疾患	43														1				1							2	4.7	
手足口病	115														49											49	42.6	
髄膜炎	108			1									1		12				1							14	13.0	
眼疾患	6				1								1													2	33.3	
その他の疾患	83			1															5		1					7	8.4	
不明疾患	42			1	1	1													2		2	1	2	1		11	26.2	
計	1,322	17	4	25	9	2	1	1	1	4	1	12	49	3	27	5	132	3	25	1	3	324			324	24.5		

㊸30~35 nm粒子, ㊹25~30 nmの周縁なめらかな粒子

1322検体より324株のウイルスが電顕観察、哺乳マウスによる分離、細胞培養による中和反応などを用いて検出された。分離率は24.5%である。主要ウイルスの分離状況は次のとおりである(表19, 20)。

(1) Adenovirus

分離株数59株のうち2型25株(42.4%)と最も多く、3月を除く年間を通じて検出され、その72%は呼吸器疾患からの分離である。また Adeno-NT (型別不能株)は17株で、乳児嘔吐下痢症患者糞便を直接精製し、電顕観察で検出されたものである。昨年度は夏季に多く検出されたが、本年は季節的特徴もなく、分離数も少なかった。また例年多く分離される Adeno-3 型は昨年に続いて少なく、眼疾患から8型が分離された。

(2) Enterovirus

表21 手足口病患者からの分離エンテロ71ウイルスの年齢分布

年齢	分離数	率 (%)
0	3	6.1
1	11	22.4
2	14	28.6
3	9	18.4
4	4	8.2
5	6	12.2
6	0	0
7	0	0
8	1	2.0
9	0	0
10以上	1	2.0

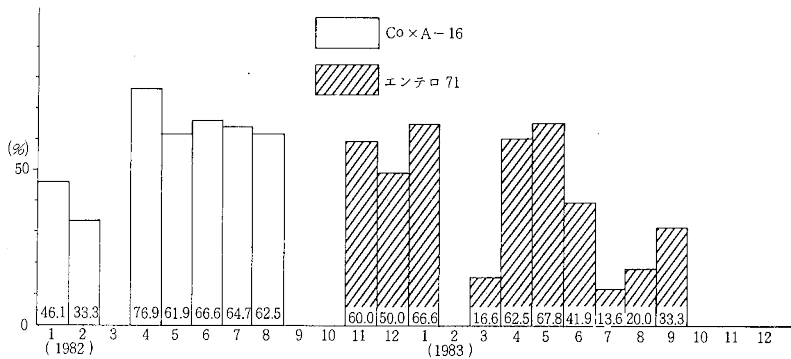


図12 手足口病患者からのウイルスの分離率について

夏季を中心としたヘルパンギーナから Cox A 4型4株、5型1株が分離され、また無菌性髄膜炎のリコールを中心に ECHO-30型が8月～10月の流行期に12株分離された。また5月～8月にかけて高松、大内の東讃を主体に流行した手足口病から、昨年の Cox A-16型に代って Enterovirus-71型が49株と多数分離された(図12)。患

者の年齢分布は表21に示したように1, 2歳が22~28%, 3歳18.4%と1~3歳児を中心に分離された。

(3) CMV

不顕性感染の多い常在的にみられる virus で、大部分は呼吸器疾患から分離され、季節性はみられない。

(4) HSV

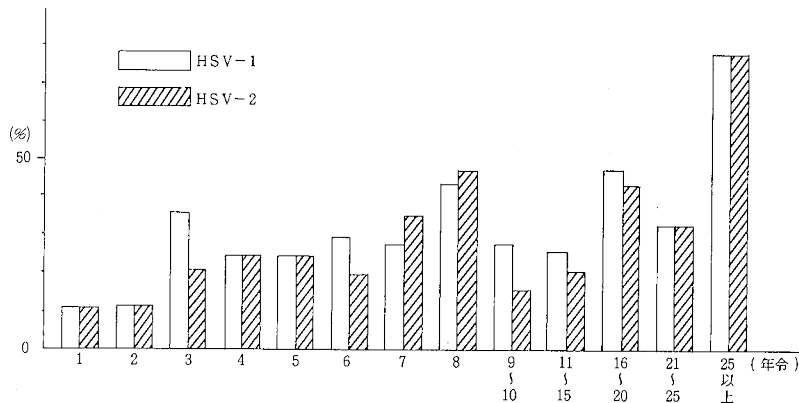


図13 HSV中和抗体保有状況について

季節性はなく年間を通じて27株が分離されている。口内炎、呼吸器系疾患が大部分を占め、県内のHSV-1型（HF株）とHSV-2型（UW-268株）に対する抗体保有状況は図13に示すように、両型間の抗原交叉が大きく、HSV-2型についてはもっと低率と考えられる。調査し

た357血清はS.58年6月～10月の間に採取したものである。

(5) RS Virus

呼吸器疾患から5株が分離され、例年と同様であった。

(6) 下痢症 Virus

表22 電頭による疾患別下痢症ウイルスの分離状況

A ロタウイルス			B アデノウイルス			C 小型球状粒子		
疾患名	検出数	率(%)	疾患名	検出数	率(%)	疾患名	検出数	率(%)
乳児嘔吐下痢症	71	53.8	乳児嘔吐下痢症	9	60.0	乳児嘔吐下痢症	11	34.4
その他の感染性下痢症	19	14.4	その他の感染性下痢症	4	26.7	流行性嘔吐下痢症	8	25.0
仮性コレラ	14	10.6	仮性コレラ	2	13.3	その他の感冒性下痢症	6	18.8
感冒性消化不良症	6	4.5	計	15	100	感冒性消化不良症	1	3.1
消化不良症	5	3.8				消化不良症	1	3.1
流行性嘔吐下痢症	5	3.8				腸カタル	1	3.1
胃腸炎	4	3.0				不明	4	12.5
腸カタル	3	2.3				計	32	100
不明	5	3.8						
計	132	100						

表23 電頭による下痢症ウイルス検出患者の年齢分布について

A ロタウイルス			B アデノウイルス			C 小型球状粒子		
年齢	患者数	率(%)	年齢	患者数	率(%)	年齢	患者数	率(%)
0	61	46.2	0	8	53.3	0	10	31.3
1	45	34.1	1	5	33.3	1	5	15.6
2	11	8.3	2	1	6.7	2	1	3.1
3	4	3.0	3	0	0	3	0	0
4	3	2.3	4	0	0	4	2	6.2
5	1	0.8	5	0	0	5	7	21.9
6	1	0.8	6	0	0	6	0	0
7	2	1.5	7	1	6.7	7	2	6.2
8	0	0	8	0	0	8	3	9.4
9	0	0	9	0	0	9	0	0
10以上	0	0	10以上	0	0	10以上	2	6.2
不明	4	3.0	不明	0	0	不明	0	0
計	132	100	計	15	100	計	32	100

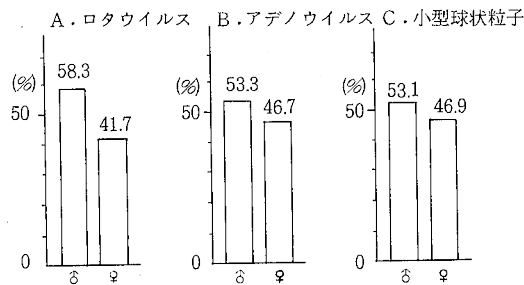


図14 下痢症ウイルス検出患者の性別について

直接糞便精製材料から電顕観察によるウイルス検出は Adeno-NT 15株, Rotavirus 132株, Small round particle 32株である。これらはいずれも乳児嘔吐下痢症より高い検出率を示し、ついでその他の感染性下痢症となっている。Small round particle は流行性嘔吐下痢症からも検出されており、その形態から次の4種に区別された。

① Calici virus ② Norwalk 様粒子 ③ 30~35 nm粒子, ④ 25~30 nm の周縁滑らかな粒子である。

Calici virus は Rota virus 流行後半よりみられ、Norwalk 様粒子は Rotavirus 流行の初夏と流行前に検出され、他の二粒子については季節的な特徴はみられない(表22-A, B, C)。

年齢別では Rotavirus, Adenovirus は0~1歳の検出率がそれぞれ80.3%, 86.6%と高く、SRVは46.9%と低く、5歳~8歳に28.1%と前二者に比べると高い検出率が得られた(表23-A, B, C)。

またそれぞれの性別による検出率は、3ウイルスとも男子がやや高い成績であった。

(7) Influenza virus

ウイルス分離は1月7日の散発例からが最初で、集団発生からは1月21日である。1月104株, 2月36株, 3月1株計141株分離されたが、すべてA(H₃N₂)であった。

IV 考察およびまとめ

感染症の動向もサーベイランスを開始して丸2年を経過し、患者発生については流行の季節性、規模、地域差、多発年齢層、周期性が、病原微生物については検出率、季節性、菌型、感受性の推移などの前年と比較しつつ検討されるようになった。本年度の成績をまとめてみると次のとおりである。

1. 対象21疾病の患者総数は15,387人で、昨年度より3,510名(18.6%)減少した。主な減少疾患は風疹、麻疹様疾患、流行性耳下腺炎、手足口病であり、増加疾患は水痘、流行性嘔吐下痢症、ヘルパンギーナであった。

2. 流行上位疾患は、1位インフルエンザ様感冒(19.1%), 2位水痘(14.7%), 3位ヘルパンギーナ(19.3%), 4位流行性耳下腺炎, 5位流行性嘔吐下痢症(8.3%)の順である。

3. インフルエンザ様感冒は全国、近県の発生状況とはほぼ同一で、昨年より一週間早い発生およびピークを示し、西畿を主とした流行で患者総数2,932名(1定点当たり19.1名)で、終息までに141株のウイルスを分離したが、分離株はすべてA(H₃N₂)であった。

4. 手足口病は昨年度の約1/4と減少しているが、ウイルスは引き続き Entero-71 が49株分離された。

5. 溶連菌分離は94.7%がA群で、T型別では数年続いた12型が29.0%と減少し、4型が41.2%と逆転し、感受性ととも今後の推移を見守る必要がある。

6. 下痢症からは C. jejuni が30.4%で例年と同様最も多く、ついで Salmonella 9.0%, E. P. E. C. など8.0%で分離率の上昇がみられた。とくに Salmonella については S. typhimurium が71.7%と大部分を占めた。また冬季に流行する乳児嘔吐下痢症などのウイルス性下痢症から、Rotavirus 129株を主にSRV28株, Adenovirus 21株, 計178株, 35.0%が検出された。

7. 8~9月に流行した無菌性髄膜炎の検体から ECHO-30型が12株分離された。

8. 本年患者数はまだ少いが、10月以降患者発生が増加しつつある異型肺炎は4年目の流行年に明年は当たり、推移が注目される。

文 献

1. 水嶋利治外：小児感染症サーベイランス(第3報)香川県医師会雑誌34(2), 21~35(1981)。
2. 庄司 真外：気象と感染症流行の相関に関する研究(第2報), 仙台市衛生試験所報第13号, 102~106(1983)。
3. 岡崎秀信外：昭和57年度感染症の動向および病原微生物の分離状況について, 香川県衛生研究所報11, 15~35(1982)。